

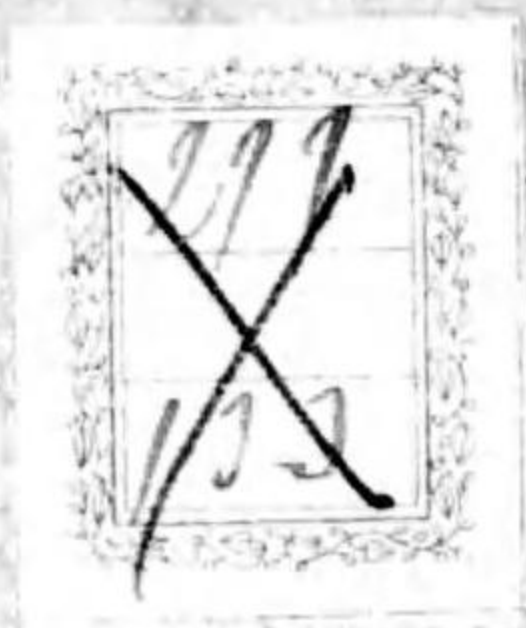
封^{ふう}

人^{じん}

窟^{くつ}

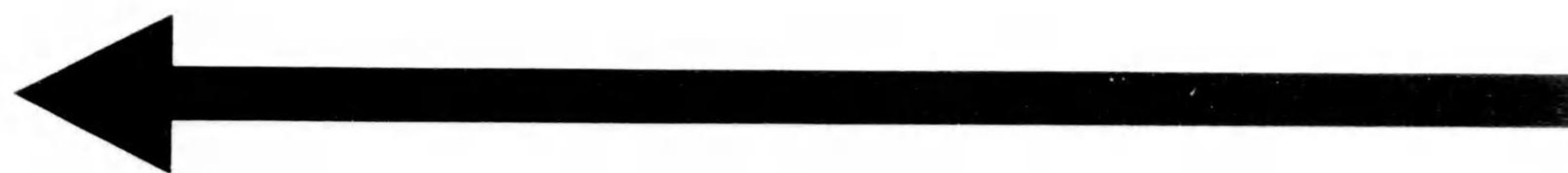
(編終)

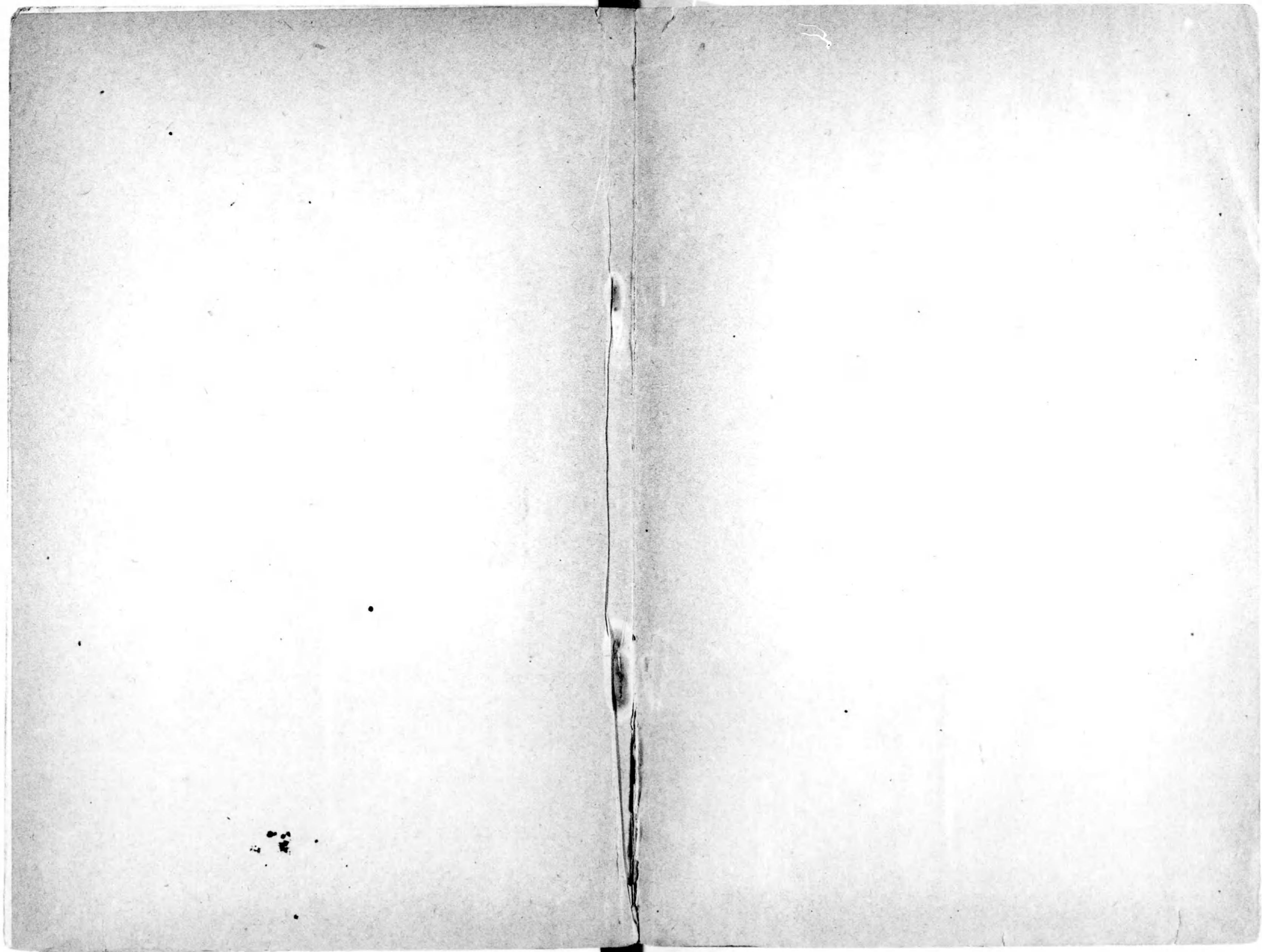
渡邊 黙禪 作
長谷川 小信 畫



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





特105
132

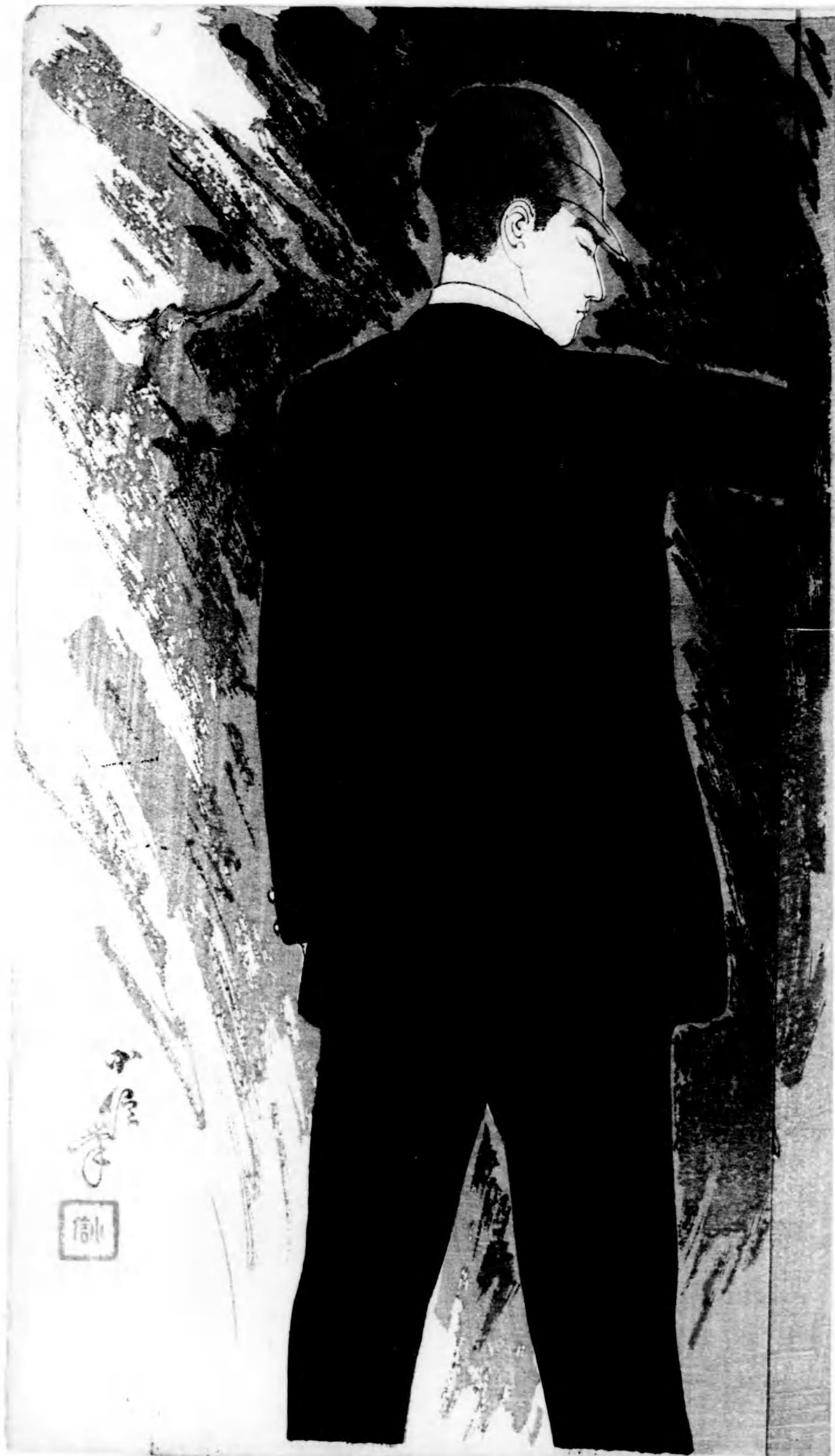


窟くつ

(編終)

渡邊 長谷川
黙禪 小信

書作
大正
4. 2. 10
内交



■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	同	同	和	同	同	伊	嶋	同	同	同	羽	同	同	同	渡
				山			藤	村				様				邊
				天			銀	抱				荷				默
				事			月	月				香				靜
				作			作	譯				作				作

戀	浪	二	弱	靜	予	怒	出	其	武	命	電	男	風	七	封	千
の	ま	人											流	首		
意	く	の	さ				の	士					菩	藝		人
氣																枝
地	ら	女	人	子	濤	湖	女	系					薩	妓	窟	子

の大多てに上紙間新。地各西東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もでん讀なれど付に物るたし博を評好



同 同

恋の意気地



封^{ふう}

人^{じん}

窟^{くつ}
(終編)

渡邊 黙禪

(一)

封人窟終編

星斗は氷のやうな呪の瞬きを、深くく雲の翼の中に潜め、どんよりとした上にしつとりと雨氣を含める空は、一面に黒布に掩はれたやう、夜更の風は肉と皮の間から、骨深く喰ひ入るかと思はれた。

小泉は頭上に縋帯を施した異様な姿を隠すために、黒色の外套

に全身を埋め、脚には靴らしいものを穿いて、護身用の最新式拳銃を懐中深く呑んで居た。

小僧を五六間遣りすごして置き、更に裏口の方に注目してから小走りに其の後を追つた。

「おい、小僧さん、おい、小僧さん、おい、おい、小僧！、小僧！」
「駆けながら呼ぶと、小僧ははたと立停まつた、而して小泉の方を見て居る。

小泉は漸く追着いて、『おい小僧さん』手を舉げて應じた。

「なんだい……、呼ぶのは僕かい……」

小僧は冷然として居る。

「左様々々お前だよ、寒いね今夜は……何か急ぎの用かい」小泉はいきなり斯様事を言つた。

小僧はけろんとした目で見て、『なんだい、誰だい、一體お前は……、僕は急ぐ用があるんだから、用があるのなら早くお言ひよ何だい一體……』日本語調だが、何所かに鮮音が混つて居るやうにも聞做された。

「左様急ぐものぢやアないよ、急いぢやア話しが出来ないぢやアないか」

「だつて伯父さん、僕だつて至急の用があるんだもの、途上で愚圖々々して居て晩になると、地下室へ打ち込まれて酷い目に會うんだもの」

地下室！、地下室！、この小僧の口から地下室の一語を聞いたのは何より幸ひ、彼を此方の味方にさへすれば、家の内部の秘密は大概判らうと考へた。

『なに、地下室其様ものがあのホールにあるのかい』今初めて聞いたやうな顔をして『地下室つて一體何様ものだい、伯父さん初めて聞くんだが教へて呉れないか』そろそろ搜りの針を入れ始めた。

小僧にニタリと笑つて『厄介な伯父さんだね、お前、地下室を知らないの……』

『あ、知らないよ、何様ものだい、食べるものかい』飽までも遠惚ける。

『何に、食べるものは、は、は、は、可厭な伯父さんだなア、部屋だよ、お部屋だよ、ホールでは上等のお客様を通すお部屋になつて居るの』

『え、部屋、上等のお客様』

『あ、夫れでね、伯父さん幾つもあるのだよ、地下室が……』

『へーえー、其様に多あるのかい』

『あ、……、夫れでね、可哀相なんだよ』

『可哀相、其のお部屋がか』

『左様ぢやアないよ、伯父さん分らないね』

『だつて可哀相だと言ふぢやアないか』小泉は昵と小僧の顔を見ながら『伯父さんは可哀相なものを助けるのが大好きなんだが、話して御覧な助けて上げるから誰でも……』

『あッ』

小僧は叫ぶやうに斯う言つて、この人に頼まうかと言つた風で少時小泉の顔を見て居た。

小泉も其の意中を窺ふやうに、見ながら『何うしたい小僧さん』

可哀相な人が居るのなら、伯父さんが味方になつて助て遣らう』

『ほ、真箇かい、全く？』小僧は小泉の側へ寄り添つた。

『真箇だとも、お前の味方になつても差聞へないよ、この通り拳銃もあるせ』小泉は拳銃を出して小僧に見せた。

『お、真箇だ、伯父さん、助けてお呉れ、話すから、女を一人助けてお呉れよ』

女と聞いて小泉の目は動いた。

彼は抑も何者ど、？所謂女は誰？

(二)

と聞いて小泉は八分に大れと合点した、この小僧を口説き立て

さへすれば、錦子の所在は判らうと信じた、何にしる此所では十分の話は出来ぬと思つたので、近所の蕎麥屋の奥まつた二階の室へ連込んだ。

詔への品々を所狭きまでに押し並べて、片端から小僧に侷め、腹一杯に食はせてから、偕て談話の端緒を断つた。

『伯父さんは誰でも相手は構はない可愛相な人を助けたいと思つて居る人間なんだが、誰だってお前の今言つた、可愛相な女と言ふのは、矢張りホールの下室に居るのかい』大概左様だらうと思ふ當りを、此方から断り出して見た。

小僧は尚ほ口に殘る蕎麥の種を噛みく、頻りに首肯いて『左様だよ、あのね伯父さん、僕の助けて貰らひたい女と言ふのはね僕と一緒に攫はれて來たの』

「なに、お前ど……」少し目的が外れた併し蛇の路は蛇、最う少し探つて見ようと「うーむ、お前は何所からか攫はれて来たのかい、誰だい、攫つた主は、え、おい」

小僧は膝を勧めて微聲になつた、

「居るの、あのホールに……」

「なに、居る、お前を攫つて来た悪黨がか、誰だい、一體」

「大變な悪黨……昨夜も一人女を攫つて来たのだよ、女役者だつてさ」

愈よ目的地に近くなつた。

「うーむ、そいつは驚いたね、攫ひ主は誰だい」小泉は包圍攻撃と云ふ風、口まで出たが、容易に突貫はしなかつた。

「誰だか名前なんぞ知らない、時々ホールへ来てお酒を呑んで居

るよ、女の姿をして出て行くかと思ふと、男の姿で飯つて來るともあるの、夫れでね乞食にもなるんだよ、僕が時々室の隙間から見て居ると男の癖にお化粧をしたりなんかしてね女の鬘を冠つて女の着物をつけて、直ぐ女になつて了ふんだよ、まるで役者だよ」
頬を膨らかせたり、目を圓にしたり、小泉は左も左も呆れたと言ふ體。

「一體、お前は誰と何所から攫はれて來たの」

「あのね、僕はね、僕の阿母さんと同じやうに大事な、田鶴子さんと云ふ伯母さんと、小さい舟で朝鮮の竹嶋燈臺の阿父さんの側を抜け出して途中で何所かの大きな船に助けられて、それから日本馬關と言ふ所へ連れて來られたの、伯母さんと僕はね、汽車に乗るお金がなかつたものだから、仕方がなしに公園の長椅子に

寝たり、人の家の廂の下に休んだりして、二三日馬關を迂路附いて居る中に、今家に居るいろ／＼なものに化ける恐い伯父さんに攫はれて、大阪へ来たのよ』

と言ふのが大體の骨子、子供の智慧で夫に絹を着せ、抑も燈臺を抜け出すに至つた事情から其後の模様をば細かく話した上自分の名と父の名母は日本人であつたことまで物語つたのであつた。

春彦が其の孤嶋に漂着して、いろ／＼困難した事は、小僧が名を明かに示すことが出来なかつたので、夫れと知るに由がなかつたが、田鶴子と聞いては正しく錦子の姉、神戸の火事以來久しく行方不明の其の人と分つた。

それがホールの地下室に居る、其の家の中で妹錦子の行方が知れなくなつた、一舉にして兩人の所在を知るのは今、いよ／＼奮

發すべき時だと思つた。

『おい、張雲さん、其の地下室に行くには何うしたらいいだらうね』最う眞面目だ。

『斯うするといゝよ、伯父さん、耳をお借し斯うだよ、僕より他に誰も知らないの』

張雲は小泉の耳元で頻りに呟いた。

小泉はニコ／＼しながら聞いて居た。

(三)

小泉直衛と張雲とが、蕎麥屋で密議を凝してから二日目の東洋ピアホールは、これから徐々人の出入りの繁くなる——夜の八時

頭の店頭の混雑に紛れつゝ、綺麗美やかな打扮をした一人の外國婦人が、米國の女優某と名乗つて、ホールに酒を呑みに遣つて來た。

見ると細面の娼婦とした美人で年紀は二十四五、例の房々した金髪を黒のボンネットに隠し、金茶色の服を纏つて左手に小形のオペラバックを提げて居た。

折柄取次に出たボーイに對つて『あの、貴下のところ、地下室ある噂聞いて來ましたが、眞箇ありますか』と訊いた。

其の語調は、日本の年の若い男が、強て西洋婦人の假聲を使つて居るのではないかと、不圖思はれもした。

ボーイは氣が着かずに『地下室？え、ございます』採手をしながら、小腰を屈めて『地下室の方へ御案内致しますせうか』

『左様です、少し私、秘密相談あつて來たものあります、人の目入る少し困ることあります、日本花村露子さん言ふ女優と、今夜此所で五萬弗の金、受渡する約束ある、それに就いて大々秘密相談しなければなりません、是非秘密の室欲しい、それで地下室望むある』誠にやかに言つた。

ボーイは目を圓にしながら聞いて居たが『あ、左様ですか、宜しう御座います、唯今一寸主人に左様申して参りまして』

『何卒左様願ひます、尤も左様永いこと拜借する必要ありません私、地下の秘密室に待つて居る中に、女優の露子さん來ますから露子さんと地下室で御面會し、其の上で五萬弗のお金を、露子さんの手にお渡しさへして下へば、夫れで用はすむありますから、用さへすめば直ぐ歸ります、五萬弗のお金渡すに就きまして秘密』

の相談あります、五萬弗さへ渡して了へば……」

一も五萬弗、二も五萬弗、五萬弗々と何か意味ありげにその一語を振廻した。

花村露子と言へば、當時荒海錦子に亞ぐ京阪切つての名女優なので、ボーイも克く承知して居る、其の女優の名を振廻す上に、五萬弗熱を吹つけられて、聊か面喰ひの體で、主人の部屋へと行つた。これまで地下室を客に貸す場合には、必らず主人に傳へることになつて居たので、其の手續をしに行つたのである。

西洋婦人はボーイの姿が見えなくなると、忽ち變な體度になつて、鋭い目に彼方此方を見廻した、夫れが何うも女の目のやうでなかつた。さうして何か心に首肯して居るところへ、ボーイが遣つて来た、今度は以前の態度と變つて、恐ろしく愛想を好くして

来た。

「さア、何卒……、直ぐ御案内致します」

「あ、左様ですか、何卒……」

ボーイは西洋婦人の前に立つた。

一直線に暗い廊下を抜けて、衝當つて右に曲つて、五六間行つたところに、地下室に通ずる五段ばかりの石階がある。夫を降りて右に曲つた。左が、地下室への扉——、鐵で頗ぶる嚴重なものであつた。

ボーイは地下室に案内してから詔への品を聞いて退いた。

註文の品々は三分と經たぬ中に、女優の前に山と積まれた。

この室は過る夜、朴永斗が捕縛され、高杉が姿を消した其所である。

血のやうな葡萄酒を獨酌で二杯ばかり引かけたところへ、ボーイの先導で女優花村露子なるものが通された。

(四)

これが僅か十二歳の張雲の小さな胸から判り出された狂言とは知らず金と女に目のない高杉勘三と風間權五郎とが、地下室に通した二人の女優の様子をボーイから聴取つて、大枚五萬弗、花の如き二人の女優、今日はそも如何なる吉日ぞと、二人は手を打つて喜んだ。

地下室に案内された花村露子と言ふ女優は、見た人の話に眞物は今年十六歳と言ふのだが、これはまた意外な老けやう、二十五

六には確かに評價る、厚化粧の白粉に顔と廂髪との調和をつけ、怒つた肩を故意と下すやうにして、紋のある鹽瀬の羽織に、下はお召らしく、白足袋を穿いて居た。

ボーイを入口の扉の外で返してつかくと椅子の側へ来た。

右の指頭に椅子を引寄せ、一寸會釋をして『何うもお待せしてすみませんでしたわね、疾うに上る筈だったのですけれど、いろいろ劇場の方都合で……、後狂言の下相談なんぞがあつたものですから』

『いゝえ、其様に待つことありません、まア凭けること宜しい、さア、さア』米國の女優は右手を舉げて、椅子に凭けるべく俯めた、相手の僅かに腰を降すのを見ながら『私、最うこの通り始めて居ります、さアお一つ……』洋壺を興へて酒を注いだ。

露子と稱する女優は酒を洋壺の中程までうけて、手許に引いた
「何うも種々お世話を願つてすみませんでしたね、あのお約束の
お金は、唯今頂戴出来ませうか知ら」故意とらしく四邊に聞える
やうな高い聲で言つた。

「え、整然と準備して参りました、この鞆の中に……」と右手
の指頭に鞆を軽く叩いて見せながら「其の代り銀行の小切手もあ
ります」

「え、何でも其の額だけならば構ひません、早速頂戴して」

「い、え、小切手ばかりぢやアないのですよ、小切手も一枚其の
中に入つて居るので、兎に角お渡し致します」

女優は右の指頭に、卓子の上の鞆を引寄せ、左の指頭を添へて
ピンと音を立てながら鞆の口を開けた。

この時入口の扉が、静かにすゝと開いて、其所から目だけを出
して、室内の様子を窺つて居るのは、頭髮の具合、頬の輪廓、問
はずと知れた變装の賊高杉勘三、目の中は物凄光に燃へて居た
室内では今兌換券を、山と卓子の上に積んだところで、最後に
一葉の小切手を取り出した。
「一寸御覧なさつて下さい、小切手の方が四萬五千弗、日本の兌
換券が五千圓……一寸御覧なすつて」右の指頭に露子の手許近
く押し進めた。
扉の外、怪賊高杉は、ためつすがめつ、熱心に室内に窺がつて
居る。

露子は一々兌換券を取調べて、一目に分るやうに燈下に押並べ
た、この時高杉の姿は何時消へるともなし失せて了つて居た。

「確かに御座いますわ、何うも種々御手数をかけてすみませんでしたわね」

「いゝえ、何う致しまして……」

花村露子が兌換券を一纏めにして手許へ引寄せやうとする時、怪しやガチャンと言ふ音、はつと思ふ間にこの地下室の卓子の直ぐ下、其所の床が方一間ほど、ベロリと舌のやうに下へ開いた、と思ふ間に其の口から二人の女優は、卓子椅子諸共、脚下の暗室に吐き出されるやうに落下した。

誰か知るべき、この二人の女優には、ホールの秘密室に忍び入るために、斯くは巧みに變装して相手の目を晦まし得たる小泉直衛と猿渡刑事の二人であらうとは……。

(五)

變装術の本来本元は此方だとばかり、刑事は美事日本女優に化けた、小泉が外國婦人とは更に意外、花のやうな女と思つたのが鬼のやうな男で、山と積上げた、兌換券は紙屑、小切手も好い加減な一時間に合せの賈物、従がつて二人の問答も、其の場だけの出鱈目出放題であつた。

「やー、闇だ！」

「成るほど眞暗だ」

「これは酷い」

「薩張分らん」

今までの優しい女の語調が、今は全く其の本性を現はして、男の語氣と變つた。

いかにも寸前暗黒、鼻を摘まれても分らないやうだつた。

間もなく聞覺のある小泉の語調として『併し君、到頭此方の術中に落ちて了つたね』微聲で言つた。

『自分が變装するからと言つて、他人まで變装するとは思はなかつたのだらう、は、は、誰にしたつて一杯食ふよ君、姿が女優で……』

『全くだ、其所へもつて来て、五萬弗々々と金の餌を流したんだからね』

『おや』猿渡刑事は暗中に斯う言つて『君……、誰か泣いて居るぢやアないか、女の聲で……、静かにし玉へ』

【うむ】
耳を澄すと成るほど聲、而かも年若い女の泣聲が、眞暗な秘密の地下室の何所からか、漂ふやうに聞えて來る。

例の蕎麥屋で小泉に話した張雲の語を事實とすると、錦子の姉の田鶴子も、この怪しのホールに居るに違ひない、居るとすると無論隠し場所はこの地下室だらうと想つた、同時に女の泣聲の主を、田鶴子ではなからうかと考へた。

猿渡刑事は『あの聲は女優の錦子さんに違ひない、何所だらう一體……、ね、君』指頭で床を撫で廻す音がした。

『さア、餘程遠いやうだね、何にしる聲のする方に行つて見様お、左様々々忘れて居つた』

【何を】

「燐寸を持つて来たのだよ」小泉は微聲で答へて「定めし斯様場に
合に出會すだらうと思つてね、西洋マッチを準備して来たんだ」
「燐寸……、うむ、左様かい、そいつはい、どころへ氣が付いた
摺つて見玉へ直ぐ、大體の様子だけでも分るだらうから」

「待ち玉へ、點けて見るから君」

小泉は燐寸を取出して暗中に點じた、ばつと一時に燃へ立つ火
が、忽ち螢のやうに小さくなつたが、漸次に孕んで来て、大きな
火影となつた。右の指頭を舉げて四邊を照して見様とする時、何
うしたのか風もないのにブツと消えた。

「ちよツ、失敗つた」

「ドレ貸し玉へ、僕が一つ點けて見やう」

「誰だつて同じだよ」

「まア、貸し玉へ」

一時近間に聞けた女の泣聲は、ばかりと停つて闇の地下室は森
どして何所からか一道の空氣が室内に流れ込むらしく、小泉の横
鬢のあたりを吹いて走るのが、微かながらに知れた。

「お、寒い、風が何所からか遣つて来る」言ひつゝ、猿渡は燐寸
を摺つた、右の手の平に風を避けつゝ、火を十分に孕ませる時、
目に着いたのは脚下に捨て、あつた蠟燭「うむ、いゝものがあつ
た」言ふ下から手早く拾つて、右手の火を移した。

暗黒界は茲に忽ち光明界と變じた、膽を奪ふやうな意外な光景
は、燈下に物凄く浮び出した。

猿渡刑事は燐寸の火を蠟燭に移すと共に、今上の地下室から投げ出された卓子の一端に、蠟を落して其の上に立てた。

「これで大丈夫」

「やア、廣いなア、なか〜」

二人は彼方此方を見廻した。

第一に目に入つたのは、右方の壁側に山の如く積み重ねた累々たる骸骨、獸か、人か、骨となつては一寸判断が着かなかつたが何にして獸の骨などならば、斯様秘密室に密藏して置く必要がない、まづ人間の骨と見るが正當だらう、秘密の地下室と銘が打つ

てある位だから、何れ不正の贓品は山の如く詰め込まれてあるだらうと、二人は考へて來たのだが、人間の骸骨にお目に懸らうとは思はなかつた。

「や骸骨だッ」

「なるほど、骨だ」小泉は叫ぶやうに言つて、

「うーむ、これは驚いた」

「犯罪……、殺人的犯罪……」猿渡は目を圓くしながら「併し、餘程古い犯罪だね、君斯う殺された人間が骸骨に化して了ふところを見ると」

小泉も首肯いて「左様、一月前や二月前の仕事ぢやアない、よもや主人は斯様目には合ふまいなア」落着いては居られないと言つた體に左右を見廻した。

「さア、斯様事になつては一大事」猿渡も人骨の上から目を轉じた。

室は十疊敷を細長く引伸したやうな型で、壁ども見るべき周囲はペンキ塗りの板、天井も同じ板を用ゐ、床も同様なものを使用して居る。

鈍い蠟燭の火に彼方を見ると、大きな旅行鞆のやうなものや、蓋のない行李のやうなものや、いろ／＼な容器が捨てたやうにゴロ／＼投げ散してある。

其の側面の壁を見ると、女の衣裳やら男の洋服やら、老人の鬘やら、支那人の帽子やら、嶋田の鬘やら、面なども数多くかけてあつた。

「は、ア、これだなア、變装の材料は……ね、君、これだよ」猿

渡は叫ぶやうに言つた。

小泉も目を見て『これだ／＼、これで化けるに違ひない』

未だこの室が開であつた時、女の泣くやうな聲を耳にしたが、夫れらしい姿も見えなかつた、小泉の胸に浮んだのは田鶴子と錦子の上であつた。

「夫れは左様と、先刻女の聲を聞いたつけぬ、遠方で泣くやうな……」

「うむ、女の方が肝腎だ、錦子さんの行方を、君が張雲とか言ふ朝鮮の小僧から聞いた、田鶴子さんの所在を捜さにやアならんが一寸見たところぢやア其様ものは見えんね、併し、聲を聞いたのは不思議だ」

「この室から洩れたのではないか知らあゝの聲は」

『其様事はないだらう』
 嚴重な大箱の積み重ねてある間だの、卓子と卓子との隙間だの
 血だらけになつた白毛布の下だの、破れた衝立やうのもの、蔭だ
 の、二人は彼方此方を捜し廻つたが、夫れらしいものは目に着か
 なかつた。

『駄目だ、何も居らん』

『弱つたね』

疑乎とすると、何所からともなく耳朶を打つ女の聲。

『やア、聞える』

『おう』

振り向く小泉の目に入つたのは、片隅にある穴、夢中に其所に
 走つた、近づいて下方を窺ふと、眼下は非常に深い岩窟、一本の

西洋蠟燭が獣の牙のやうな鋭い岩角に立てられて、其の下に二人
 の女の縛られて居るのが、悄乎と浮ぶやうに見えた。
 『やア、居る〜』小泉は覺えず高く叫んだ。

(七)

小泉が岩窟の下方に見出した活ける幽鬼の如き二人の女は、紛
 れもなき田鶴子と錦子の姉妹であつた。

いはゆる千丈の堤も蟻の一穴、僅か十五歳に足らぬ小僧の張雲
 の手引で、今しも大事の秘密室に、驚くべき計畫が二人の間に企
 てられつゝ、ありとも知らず、丁度この時刻に、ホールの奥まつた
 二階の洋風の一室で他人入らずの對坐、入口の扉の鍵をかけて卓

を圍み、椅子を近着けてひそくと密議を凝らしてゐるのが高杉勘三と風間權五郎の二人であつた。

室内の様子を廊下から窺ふことの出来ないやうに、窓のカーテンを十分に張り擴げて、硝子戸を確と下げて、隙間渡る風も入らぬやうにしてある。

高杉は霜降りの短衣に、荒い堅縞のズボン、白つぼい上衣の襟を、左右に擴げて居る。それから焦茶無地の短衣に、ズボンは黒色、同じ色合の上衣は風間權五郎、五十前後で日に權のある男である。

『最うあゝして置けば一安心、其様に急ぐには當らん』風間は悠々とした語氣で言つて『今夜一晩あのみ、に抛つて置いて、凡べて明日の仕事さ、高が女だ心配するには當らんよ』依然女と思つ

て御座る。

『彼奴は心配にはならんがね、五萬弗の金が心配だよ、君』これは高杉勘三の聲『夫れに全部正金ならい、が、小切手が九分を占めて居るのだから、何所の小切手だかそいつも見たいね、何にして皮の摺り切れた古墓口を、新米の拘摸が電車の中で拘つたのだ違つて、五萬弗と言ふ金高朝鮮釜山に隠してある十萬圓の金塊と同様な扱ひをして置きたいので、それに何ちやアないか、玉だつて頗ぶる附の上玉だし、騒ぎ廻つて顔に疵でも拵へられて了つた日にやア、玉なしただからね』

『それも左様だ……、併し、今夜はよさう、大分客も多いやうだし、秘密が外部に曝露すると困る』
『其様に今夜は客があるのか』

『近頃にない繁昌だ、上も下も満員だよ』

『左様か、ちやア劍呑だ』

少時考へて居た風間は『それとも斯うするか、其様に君が氣にかゝるのなら』

『何う？』高杉は椅子を進めた。

風間は微聲で『あの張公なア』張雲のことを言ふのである『あいつを例の秘密の口から忍ばせて、室内の様子を見せさせやうかあの小僧なら人目にもかゝらんし、容易に事が運ばうと思ふ』

『うむ、左様だね、あいつを秘密の口から忍ばせて、兌換券と小切手だけでも……、うむ、それがいゝ』

『待てよ、ね、と』風間はまた一思案して『斯うしたらいい、だらう、寧ろ明日の朝の食事の時に、奴に下に居る二人の女のどころ

へ食を運ばせて、其の歸り途に持つて來させたら左様すれば一擧兩得、夫れとなく女の様子も判る、ね、何うだい』誇り顔に言つた。

高杉は破顔微笑『うむ、夫れが上分別、一擧にして雙方の模様が知れるから、今夜は我慢して左様しやう何にしる五萬弗と言ふ仕事だから、少し位は我慢が肝腎だ』

『左様決めるさ』

『うむ』

風間は話頭を一轉した『夫から君に疾うに話さうと思つて居たのだがね、あの君が釜山に隠して置いたと言ふ金塊だが、機會があつたら、日本内地に持つて來る方がいゝせ』

『左様だね、君に話した通り、手帳が何者かの手に渡つて了つた

のだが、何日誰の手に奪ひ去られないとも限れない』談は夜更まで盡きなかつた。翌朝張雲を秘密室へ遣つた、姿も見せず返事も無い中に日が暮れて、夜の十時頃になつた。と、突然ホールの前が騒々しくなつたので、何事だらうと風間が自分の室を出やうとする所へ、高杉が青くなつて入つて來た。

(八)

『大變だ、君、大變だよ、迂濶にやア外へは出られん』
 『な……、ご……』風間は唯惑つた。
 『兎に角、危険だから中へ……』

高杉は右の手首に、風間の胸を押しつゝ、左の指先に扉をピンと閉めて、其のまゝ、相手を椅子に凭らしめ自分も忍ぶやうな腰付で椅子に凭つた。

『大變とは何だい一體……』風間は心配さうに訊いた。

高杉は落着かない態度の中にも、一人して小首を捻つて考へて『何うも訝しい、誰か密告でもしたと見える、内部の様子を知つたものが……』

『えッ、密告？、密告つて刑事でも遣つて來たのかい』風間も流石に顔の色が變つた。

高杉の目の中は恐怖に騒いで『刑事どころか大變だ、二三十人の巡査が家の周囲を取り巻いて居る』
 『なに、巡査？』

「巡查だよ」

言下に風間は椅子を放れて「そいつは油断がならん」忽ち目の中は険しく變つて「いよゝゝ駄目だつたら焚くのだ、焼いて證據を残さんやうにするのだ」言ふ下から側に置いてあつた拳銃を取て衣袋に吞ませた。

「焚くのはいよゝゝ最後の話だ、未だ左様騒がんがい、」

高杉も立上つて、上衣の釦を確どかけた。

二人は仁王立に衝つ立つたまゝ、目を裾る耳を澄した、耳朶を打つのは外の動揺めき、それが刻々に激しくなつて來た、罵り合ふやうな聲が消へると、最う亂調子の靴音が聞え出した、と間もなく段梯子を駆上る足音、廊下で罵り合ふ人聲。騒ぎは漸次に近づいた。

「やッ、最う駄目だ！」高杉は叫だ。

風間は屹となつて「君、火を頼むよ、焚かう、仕方がない」

「宜しい」

「ちやア、例のところで待つからね確と頼むよ」

捨てるやうに言ふが早いか、風間はいきなり扉を蹴放して廊下へ出た前面から來る巡查を殴り飛ばして、一直線に段梯子を駆降りた。

高杉は五分間ばかり室内に忍び、外の様子を窺がつてから、私と忍び出た。

其の時はもう入口も裏口も二三十人の巡查がひしゝと包圍して、他の一隊は一氣に店頭に入し、支那人の例の金明春を筆頭に、客以外の店員を片つ端から縛し廻つて居たところだつた。

一方二階に驅上つた一隊は、慌て狂ふ怪しの女を、片端から珠
數繋ぎにして、裏梯子を降りて、例の地下室へと突入した。
今の騒ぎに不意を食つた一味の醜類は、裏手から逃げやうとし
たが、待設けた非常線に飛び込み、他愛なく片端からばたくと
繩をかけられて了つた。

地下室に突入した十數人の巡查隊が、室の一角を打破つて、將
に下層の室に入らうとした時、轟然たる爆音諸共、地下室は言ふ
も更、ホールの半ば猛火と共に碎け散つた。豫て装置のダイナマ
イトが高杉の手によつて、立所に爆發せしめられたのである。
搜索隊の巡查の半は、この慘火の中に鬼となつた。高杉は如何
風間は如何、抑もまた小泉を始めとして田鶴子、錦子、張雲等は
何うしたらう。火は瞬く間にホールを焼いて、隣家へと燃へ移つ

て居た。

朝鮮平安北道朔州より東へ六清里人煙絶えた幕嶺の麓に、三疊
敷ほどの廣さの天幕を張つて、今其の下で熾んに枯木を焚きなが
ら、暖を執りつゝある二人の男がある。

(九)

老いた方は荒海春彦若い方は平尾金作であつた。この一行二人
は朝鮮全羅南道沖の竹嶋燈臺の下で、燈臺守陸のために、すんで
のこと一命を殞すところであつたのを、意外にも我兒田鶴子のた

めに救はれ、辛ふじて小舟で竹嶋を逃げた、少時の間は方角も何も判らない、萍同様の漂流を繼續して、運を天に任せて居る中に丁度通り合せた朝鮮鎮南浦行の汽船がそれを見出して、直に救ひ上げて呉れた。

萬死に一生を得た二人の喜びは一通りでなかつた。内情を打明けて頼むのは此の時と、二人は船長に會つて、包ます今の身の上を語つた、無論其の目的も話して——、と、船長は非常に同情して呉れ、鎮南浦までの無賃乗船を許した上に、金鑛探検に要する資金の中へ、五百金を投與し、且つ鎮南浦着後、諸種の準備を整へる上に付いて、出来るだけ便宜を與へて呉れたのであつた。

意外な救主が意外な斜旋をして呉れたので、準備萬端は急速力で完成し、鎮南浦着後僅かに五日にして目的地の平安北道に向つ

て進發した。

出發までの準備は、斯く易々たるものであつたが、借目的地に乗込んで、金鑛探検の仕事に着手して見ると、凡てが豫想と反して、非常な難關苦境に重ね々逢着して。土地不案内のために、旅行に意外の日子を徒費したのと、變つた氣候に命てられて、春彦は途中で病氣に罹つた、又た準備して居た糧食の大部分を、朝鮮の山賊同様な無頼漢のために奪はれた、此の二つの出來事は一行のために大打撃であつた。

平安北道に入つてから、殆んど三月強と言ふもの、平原に暮れ寒村に明け森林に迷ひ、深山に彷徨ひ、何の獲るものもなく夢の如く過ぎた。

漸次に糧食は缺乏して來る、資金は乏しくなる、前途が心細く

なつたので、幕嶺の根を根據地として全然方針を一變することに
 した。夫れは斯うである、今までは鎮南浦で雇つて來た二人の鮮
 人に、主に後方勤務——寢具、糧食の運搬、炊事の一切を任せ、
 春彦と平尾とは前線の戦闘、即ち直接探險事業に奔走して來たの
 を、今度春彦と平尾とが、後方勤務の一切を受持ち、鮮人二人に
 瀨踏みの探検を行らせ、其の報告を聴取した上で、有望と見込の
 ついたところへ、二人が出かけて再調査を行ふことにしたので。
 で、今は丁度二人を出して遣つた後のところ、枯木を火中に投
 げ込みつゝ、春彦と平尾とは今し話に餘念がない。
 日本内地は早や春の季節であつたが、二人とも鎮南浦で調へた
 まゝの冬の旅行服、短衣も上衣も、ズボンも烏打も、土に穢れ垢
 に黒ずんで、縞目も判らぬまでになつて居る。手袋も五本の指が

顔を出して居れば、草鞋の下に穿いた足袋も破れて居た。
 『今日は林も陳も非常に遅いやうぢやアないか君』春彦は両手を
 火に躡しながら、後方の山の根に續く林の方を回眺つた。
 平尾も其の方を見て、一寸時計を檢しつゝ、『左様ですね、平日
 より一時間ばかり遅い、ぶら／＼遊んで居るのだらう、内地人と
 違つてなかく／＼度し難いですからなア』
 『左様だね、從順のやうで從順でない、如彼調子では困る』春彦
 は力なげに言つた。
 『なんですよ、後で聞くとおの二人は、鎮南浦の無頼漢だ
 と言ふ話しで』
 『無頼漢？、そいつは厄介なものに引か、つたね、何にしる恩威
 兩道で餘程旨く行らんと不可ん、短銃などを携へて居るぢやアな

封人窟終編

いか』

「え、護身用だと自身は云つて居るのですが、何に對する護身だが分らんです、二三度反對に威嚇して遣りましたよ」

其所へ噂をして居た二人が歸つて來た。

「旦那、旨いもの見出ました」

「旨い？、何だ」

「金鑛！」鮮人の一人は叫んだ。

(100)

四十前後の鋭い眼光毛虫眉で角鼻の身材の高いのが、林雲章と云ふ鮮人で、他の一人は張啓光、前者のに較べて十五六の年少者

頬の肉の貧しい、厭に尖つた鼻、狼のやうに瘦せた男であつた。

背後の山から落ちて來る蒼然たる暮色は、この邊一帶の樹立を置めて漸次々に密度を加へ、終には野も山も丘も唯一色、其の大きな翼の中に深く吞まれて了つた。

林と陳とは携へて來た杖のやうな握太の木片を、天幕の片隅に投げて悠然と焚火の側へ歩み寄つて、そうして腰を屈めながら手を差出した。

平尾はまづ其の顔を睨と見て、金鑛つて、一體何處だい、それは……何を言ふかと半分冷笑的に云つた。

林の目の中には希望の色が漂つて居た。

「旦那、御褒美から前に決めて下さい、大したものですせ、旦那なア陳」自分の側に居た陳を顧みて云つた。

陳も屈めた膝を一尺ほど進めて、

「真箇です、旦那、一寸見ればかりなので、十分のことは判りませんが、五十萬坪、百萬坪は……」

「百萬……、百萬坪つて何か鑛區がか、金鑛の……」春彦は意外と云ふ態度。

陳は其の目を見て「左様です、委しいことは分らねえが、なア兄貴五十萬坪か百萬坪は」

「全く、其の通りだ、旦那、兎に角虚構だと思つたら一緒に来て御覽ねえ、だが、其の前に今の褒美の一件だ何うして呉れますえ旦那、鑛區の先取權は此方にあるので、無條件ぢやア旦那に見せられねえ、何とか決着をつけてお呉んねえ」なか／＼權利を主張する。

平尾は側面から「お前達は其様事を云ふが元來お前は我々の使用人として同伴したので、我々の命令の下に働いて来たのだから……、併しなんだ、今其様野暮な理屈を云つても仕方がないから兎に角、斯うしやう、え、と、なんだらう、夫れは君等は左様信じて居つても、君等の目と、我々の目とは自から其所に相違があるのだから、見た上の話しにしやう、我々二人が其の鑛區を一見して、成るほどこれは立派なものだ、君等が誇るだけの價値があると分つたら、何様要求でも君等の希望に應じやうぢやアないかね、夫れならい、だらう、人間には考へ違ひも、思ひ違ひもあるものだ、だからね、一概に君等の説をい、とも信じられないし、また我々の主張も無理に通すわけに行かん、ね、それならい、だらう、左様しやう」

『左様、夫が一番公平だ』春彦も側から云つた。

林は枯木を火に加へながら『ちやア何ですかい、鑛區を見た上で、褒美を決めやうと云ふのですね』

陳はつまらなさうな顔色をして居る。

『左様だよ、夫で可いちやアないか見た上で決めるのに不思議はないぢやアないか』

平尾は故意と氣色を損じて見せた。

林は右の指頭に頭上を搔いて『ちやア仕方がねえ、左様しませう、其の代りなんですせ旦那、旦那が今の語を反古にするつてえと、此方にも了見があるんですせ』

『は、は、は、馬鹿に凄味を見せたね、お互に仲好く行らうぢやアないか、大丈夫だよ、心配するにやア當らん』

『實際懸念することはない』

春彦も側から宥めるやうに云つた。

其の場は無事に濟んだ、同夜一行四人は天幕の下に冷たい夢を結び、翌日早天其の地點を引揚げて、飛龍山の山腹——林の所謂金坑の入口に達した。

實地精査の結果は、果して金の宮か、將たまた石の窟か……。

(一一)

『旦那、最う日が暮れる』

『お、今日は駄目か』

一行四人が飛龍山腹に達した時には、日影は早や西に暮きかけ

て居たので、窟内の探険は明日に延し、其の夜は飛龍山麓に天幕

を張つて、醒め易き夢を辿つたのであつた。

翌日は未明から起き出で、朝餐を済ますや否、直に探険の準備
に取りかゝること、なつたが、先決問題として部署を定める必要
があるで、種々相談の結果、最初は春彦と林雲章とが大體の調査
を行ふことになり、平尾と陳啓光とは山麓の天幕内に止まつて、
糧食其他の張番をすることに決した。

其の次はいよいよ準備である、窟の中は眞暗だと云ふ林の注意
に基き巡査の提げて行くやうな角燈と、西洋蠟燭を卅本、夫に燐
寸を五個、二日や三日は窟の内で寝る覺悟だから毛皮の敷物と白
毛布とを各自一枚つゝ、夫に鐘詰と野菜類と食麵麩とを都合三日
分用意した。

煙のやうな霧を吹いて、飛龍山上から頼れて来る寒い朝風に面
上を拂はれつゝ、窟の入口まで送つて来た平尾と陳とを後に捨て
、二人は奥深く辿り入つた。

窟の前面は大木の根と生ひ茂る草とに掩はれて居るので、側へ
寄つて両手で押し分けて見なければ、入口の有無は分らぬ、今ま
で人の目に發見されずに居たのも無理はない。

窟は巾着のやうに口元が狭くつて、奥に進むにつれ次第に廣く
なつて居る。

林は角燈を右手に左手に杖、背には準備の品を負ひつゝ、凹凸常
なき岩の路を、春彦の前に立つて辿つて居る。

春彦は右手に握り太の杖、前にちらつく灯火を頼みに、覺束な
くも足場を計りつゝ、進んだ。

「何だい、普通の岩窟ぢやアないか」春彦は後方からけなすやうに言った

「い、え、是からですよ、何しろ五十萬坪以上の鑛區なんだから最う少し辛抱して下さい」林はすんすん前に立つて進んだ。

「何だか知らんが、何所を見ても岩の穴だ」

「左様です、今の所は全くの岩の穴です、今に驚ろきますせ、旦那」

話しつゝ、漸次に奥へくと入つた首を回らして見ると、今まで踏んで来た路は、黒魔の翼のやうな闇の中に消えて、何所を何所と見定めがつかない、何となく呼吸が苦しくなつて来たやうな氣もする、併しまだ口に出すはごではなかつた。

「まるでトンチルだね」春彦はまた後方から「随分歩いて来たや

うだが非常に深い穴だ、自然に出来た穴か知ら、夫れと我々の前に誰か鑛脈の探險を企てた際、穿つた穴だらうか知ら、斯う奥深く自然に穴の出来る筈はないよ」餘りに深いので不審を打つた。

「左様です、俺も左様思ふので、この邊で露國人が金鑛を探つたと言ふ噂があるから、誰か以前に行つた後かも知れねえ、行れば今云ふ露國人なんだが、探檢中に中途に穴の中で死んで了つて、其の儘になつて居るのかも知らねえ」

「うむ、左様だ、其様事だらう、でなくつて斯様に奥深い穴が、自然に出来るわけはないよ、確かに人工が八分加へられて居る、餘程大仕懸にやつたものらしい、何うして夫が世間に知れないで居たんだらうなア」

「だから作業中何かの故障で、一時に全部死んで了つたに相違あ

りませんよ』

前に立つた林は、斯う云ひながら窟のドン詰りに衝當つて、手の角燈を少し差揚げ、ひよいと右の方を見て高く叫んだ。

『旦那！、大變だ！』

(111)

暗い穴に角燈の微光一つ、心細いこと限りない、加之に持つて来たと思つた懐中時計を出發がけに急いだために、天幕の下に置き忘れて来たので、時間を確かめる手段もなかつた、唯腹の空き具合から考へると、十二時は疾うに過ぎて、午後の二時頃らしく思はれた。

林の聲に春彦も驚いて前を見ると忽然として眼前に現はれたのは、一見十坪ほどの廣さを有する箱のやうな角形の大穴、夫よりは真先に目に着いたのは、岩と言ふ岩、石と言ふ石の全部が、燦爛として金色に包まれて居る夫であつた。

『むむ、き、金だ！』春彦は愕き叫んだ夢ではないかと思つた。

林も豫期以上に驚いた體だつた『金の穴！』と、唯一句。

衝當つて右の方の一角には、今まで辿つて来た穴ほどの廣さの空所が腫氣ながら目に入った、多分奥へ進む入口だらう。

この廣い箱のやうな穴の上部を仰見げると、何か鋭利な機械を用ひて岩を斬落し、石を殺崩した痕跡が、歴然として認められた目を轉ずると、彼方の隅、此方の端、到るところに、鶴嘴のやうなものや、シャベルのやうなものや、吠や、俵や、支那刀や

拳銃やが、雑然として轉がつて居る、夫がまた餘程の年月を経たものらしく、錆び付き腐れ切れ、どれを見ても原形を存したものとてはなく、首が取れたり、色が變つたりして居る。

腐れた側の吠の中を見ると、黒く變色した、鑽石や、石炭殻のやうなものがウンと、詰り込んである。

夫れから三尺ばかり隔つて、岩角の缺けたのや、鑽石の細末にしたのやが、山のやうに積み重ねたまゝになつて居る。

進むに連れて二人は、偉大なる金光に包まれた。
『昨日見た時は斯様ぢやアなかつたが、大した金だ、旦那、全部金ですせ、これは……』林は今更のやうに斯う言つた。

春彦も驚異の目を睜つた『全く金の世界だ、大したものだね、この模様で見ると、確かに何者かの手によつて、金鑛の發掘が續

行されたものらしい』

『左様です』

二人は空服も忘れて、段々奥深く進んだ、進めば進むほど、脚下の取散されてあるのが分つた、鐵の軌道やうのもの、壞れたのや頭を切り揃へた杉の丸太などが、所狭きまで轉がつて居るの目に入つた。

『お、これは運搬しやうと思つたのだなア、あるく、箱がある、この箱へ入れて運ぼうと思つたのだ』

林は脚下の軌道を照して見て『うむ、左様だ、左様言やア、先刻来る時に斯様ものが脚下にごろく轉がつて居たが、矢張り是だつたのだなア』

『左様だつたかね、少しも氣が着かなかつた……、林、お前、腹

は空らんか」

「少し北山になつて来ました」

「ぢやア、此所等で一休みして飯にしやう、ね、それから後の事に爲やうぢやアないか」

「左様ませう」

二人は金の窟の中で、全身に金色を浴びつゝ、晝食をも夜食ともつかぬ食事の箸を擧げることになつた。

「何しろ非常な寶庫だ」

「大したものでせう」

「ドレ、前面の穴へ入つて見様……」

林は春彦の前に立たれたので、携へて来た凡ての物を其所へ置つ放しにして、衝當りの入口に進んだ。

此所はまた前にも優れた凄絶の光景が、眼前數尺の彼方にぼつと浮び出した。

(一三)

凄絶の光景とは何。

累々たる死骸の山と言つたところで、顔や手足の夫と判る皮肉の附着したものはなくて、唯見る一介の骨、頭だの、腕だの、脛だの、腰だの、胸だの、いろんな部分の骸骨が全然薪でも積上げたやうに、重り合つて居るのだ。

夫が全部ばら／＼になつて居るので、何の骨とも一寸見分がつかぬが形状から考へると、獸ではないらしい、確かに人間と思

はる、節が多い。

たま／＼骨どなつたま、崩れずに原形を存して居るのを見ると、抱着いて争つて居たらしいのや、噛み合つて怒つて居たらしいのや、如何に其の最後の状態が悲惨を極めたかと言ふのが、一目見たばかりで直ぐ判つた。

『うむ、これは人間の骨だ、は、ア分つた、何だなア……、この仕事に従事して居た人間同志が、権力の争ひから格闘しつゝ、其のまゝ、何かの障害を受けて死んで了つたものか、夫でなければ作業中に糧食の缺乏に會ひ、食物を争ひ合つたと言ふ模様が、ありありと認められるね』

春彦は、肝腎の金鑛のことは少時忘れて、この怪異の光景に胸を戦かすのであつた。

『其様事でせうね』

林も唯斯う言つた。

骨の重り合つて仆れて居る場所は六坪ほどの平坦な岩の上で、岩の根は何丈と底の深さの知れない金鑛の大穴、鈍いながらも角燈の光に見ると、四面目に觸るゝところ全部石英脈の鑛石岩だ。

『旦那、大穴！』林は初めて見出して叫んだ。

春彦も首を伸して覗いて見て『やア、穴だね、是は確かに金鑛の穴だ！、うむ、馬鹿に深い……』

林は恐る／＼寄つて、右手の角燈を差出し、穴の底の方を窺つた。

見ると口元の三角形を成した岩の根に、鐵の太い鎖が繋いであつて、其の一方の先は、すゝと暗い底の方に落ちて居る。

早くも目を着けた春彦は「おい、鎖ちやアないか、あれは……ね、左様だらう、あの鎖に縋つて穴の底へ降るんだ、必と……」
 「うむ、鎖、鐵の鎖です」林は穴の口元まで寄り添ひ、腕と夫を
 検めてから「太い鎖だ、頑丈な……、旦那の仰有る通り、この鎖
 に縋つて穴の底に降るんだ、お！、旦那、御覽なさい、穴の中に
 ピカ／＼光つてゐる星のやうなのが見えませうか、金がドツサリ有
 るに違ひない、旦那、一つ降りて見ませうか、鎖に縋つて」
 「危い、止せ／＼、何丈あるんだか譯は分らん、迂濶り入つて上
 ることが出来なかつたら、この人間の骨の主のやうに死んで了は
 なければならぬ」
 「夫も左様です」

二人は穴の周圍を繞つて仔細に調べた。周圍は四五間は大丈夫

な大穴で、岩には毛狀の金が露出してゐた。
 「實に大したものだ、林、兎に角引揚げて、外の凡てのものを内
 部に運ばせやう、而して一同して仕事に着手することにしやう、
 一體何時だらうね、晝だか夜だか少しも分らん」
 「旦那、最う夜ですよ」
 「左様だらう、何うも左様らしい」春彦は一寸穴の中を見て「大
 した金鑛だ、おい、林、最う少し燈火を……」
 林が角燈を差出すのを待つて、ひよいと脚首を、側の岩に踏懸
 けやうとした、岩と思つて踏んだのが空、驚いて慌てたから堪ら
 ない、する／＼と岩角を摺る音を殘して、杖を携へたまゝの春彦
 は、暗い鑛穴の奥深く眞逆に落ちた。

朝風寒く、夕靄深い飛龍山麓の天幕の下に、荒海春彦と林雲章との歸りを今日か明日かと待つて居た平尾金作と、陳啓光との二人は、二日経つても三日経つても、姿を見せないばかりか、何の音沙汰もなかつたので、徐々心配になり出した。

最初は二人の中一人が、二人の跡を追つて行つて、様子を探らんかとも思つたが、陳一人を放して遣るのも心元ないし、左様かと言つて、自分は猶更行く譯にはいかぬ、何故と言ふと、己れは一行四人の生命と頼む大事な糧食を保管して居る責任がある。天幕を空にした、めに、萬一この邊に多く住む山賊同様な無頼漢に

糧食を奪ひ去れでもしたら大變、夫よりは最う少し氣を永く、内から便のあるのを待たうと思つたのが三日目だつた。四日目の一日も暮れて五日目の朝になつた時は、流石に最う安閑としては居られなくなつた。

陳の心も平尾と同様であつた。

例の通り平尾は、食後枯木を焚きつゝ、陳に對つて話し出した

「陳、變だね、一體、二人は何うしたんだらう、三日分の糧食は用意して行つたのだから、三日間は可いとして今日は五日目だ、食はないで居れば兎に角だが、室内で三食を執つたとすると、昨日の一日分の糧食がない筈だ、何うしたらう、變だね」

「事情が分らねえ」

「全く事情が分らん、お前が言ふ通りに、中に莫大な金坑がある

のなら、最う歸つて来て報告しさうなしのだのにね」
陳は急に何か氣づいたやうに、はつと顔の色を變へた『やッ、
中られたかなア』と、だしぬけに叫んだ。

『何』と、平尾は其の顔を見て『中られた？、何？』

『瓦斯！』

『瓦斯？、其様ものが窟の中にあるのかい』

『大變です』

『中られると言ふと……、何うなるんだい、一體……、ね』

『窟の中の瓦斯に中てられると、死んで了ふんですよ、旦那』

『死ぬ』

『え、陳は力のおる聲で言つて、實は今だからお話し申します
がね、林と俺とこの前に入つた時、俺がすんでに中られるところ

だつたので……』

『其の瓦斯にか』平尾は目を圓くした。

陳は乗り出して『左様で……、實は斯うなんですよ、林と俺と
出かけた時にね、細いトンネルのやうな岩の穴の中を行く時、俺
が何だか急に不快な心地になりましたね、氣が遠くなるやうな、
何所か暗闇に引入れられるやうな……』

『成るほど』

『夫からこいつは瓦斯だなど思ひましたから、急いで五六間後の
方へ遁けて、持つて居た水を一口呑んで、落着いて居て漸く正氣
になりましたがね、あれが最う少し愚圖々々して居様ものなら、
あすこで生命を落して了つたのですよ』

『ふーむ、其様事があつたのかい、そいつは劍呑だね』平尾も今

更のやうに心を寒くして「其様ものがあつては危険だ、斯う長く
 便のないところを見ると、中られたのかなア、其の瓦斯に……」
 「何とも知れませんが」
 「事實とすると大變だ」
 「安閑としては居られねえ」
 平尾が不圖見る氣もなく、窟の入口の方を見た時、ひよろ／＼
 と其の口から外へ出た人影があつた。

(一五)

「おや、誰か出たぞ」
 言ふ下から平尾は立上つた。

「誰だい、一體」

陳も續いて……。

岩の根に絶つたり、草の蔓を捉へたり、漸く近着くのを見ると
 夫は鮮人の林雲章であつた。

「お、林だ」平尾は覺せず駆け出して迎えた「林、何うした」
 叫ぶやうに訊く、

陳も平尾の後に尾いた。

林は天幕の前まで来て、何も言はずにばかりと仆れた「だ、だ
 旦那……、は、腹が……、何か食はして……」と、腹の所を指さ
 しつつ、空腹で耐らないと言ふ體を示した。

平尾は早くも見て感り、有合せの麵麩と少量の湯とを與へた。
 林はそれで僅かに昨夜來の餓を醫した。

「林、何うした、荒海さんは何うした、お前一人か」

「旦那、た、大變です」

「なに、大變だ、何うした」平尾は林の側へ腰を卸した。

陳も不安の眉を動かしたつ、林の側へ来て腰を屈めたのであつた。

「旦那は金鑛の穴藏へ落ちて、行方が知れねえ」

「なに、行方……、金鑛の穴藏……」

平尾は愕然とした、陳は徒に目を圓くして居た。

「如何かして探さうと思つて……、旦那の居所を捜さうと思つて三日ばかり穴の中を、はつき歩いたのだが、影も形もねえ」林は失望の極、投げるやうに言つた。

「穴藏へ落たつて……、そ、其様に深い穴が窟の中にあるのか」

「左様で、大變に深い穴があります、而して其の穴の中は全部金の岩です金の穴藏！」と、叫んだ。

「ぢやア、いよゝゝ金鑛のあることが分つたのだね、確まつたのだなア」

「確まるも確まらんもねえ、穴の中は前から金鑛で、旦那、行つて御覽なさい、夢のやうですぞ、まるで」

「左様か、夫はい、が、兎に角困つたなア、荒海さんの行方の不明なのは」平尾は當惑したやうに云つた。

其の中に陳は林に對して「其様かい中は……」

「其様にも斯様にも口ぢやア云ふことが出来ねえ、お前ど一緒に行つた時よりは、餘程奥の方へ行つたところが、大きな深い穴があるんだらう」

『うむ』

『夫から旦那と二人して、彼方此方と調べて見るつてえと、岩と云ふ岩、石と云ふ石、何を見ても、全部ピカ〜光つてるぢやねえか』

『ほほ……』

『夢ぢやアなからうかと思つてのう手で撫で、見るつてえと、夢どころか全くの金、金の世界へ飛出したやうなものさ、それにお前、其の穴の中が大變だ』

『大變つて？』

『大變つて、何所から何う手を着けて可いか、金の御光に射殺されるかと思つたよ……、何にしる大變なものだ、夫で金の世界は其の穴藏だけぢやアないのだよ、まだ〜前は廣いのだ、何所で

奥が盡るんだか譯が分らん、底なしの金の井戸だよ、俺は恐ろしくなつて了つた』

林が陳に話して居る様子を、平尾は側で黙つて聞いて居たが、不圖電光の如く其の胸に浮んだ一事、夫は久しく彼の胸裡に往來して居た最も恐るべく、且つ憎むべき企謀……。
恐るべく憎むべき企謀とは抑も何。

(一六)

平尾金作は、春彦の手前は飽までも猫を被り羊を装つて、其様模様は暖飛にも出さなかつたが、實は神戸を出發する當時から、胸の底に私かに疊んで居た權利の獨占、この事業に失敗したら罪

を春彦に塗りつけ、巧く行つたらば金鑛の探掘権を自分一人の手
 に収めて、春彦を體好く局外者にしやうと言ふ野心を抱いて居た
 局外者にしやうと言つたところで同人を其のまゝにして置いた
 のでは夫は困難である、然らば何うすればい、唯非常手段ある
 のみだ、それには頗るお誂へ向の土地、朝鮮もすつと奥まつた北
 の果なる平安道の山中一人か二人人間を屠つたところで、何うに
 でも隠し場所はある、胡麻化して知らぬ顔をして了うに何の雜作
 はないと思つた、而して其の決心が既に八分まで着いて居たこ
 ろへ、都合の好い林の報告——春彦は窟の中の穴藏の底へ落ちて
 行方が知れなくなつた、多分岩穴の毒瓦斯を吸つて死んで了つた
 のだらう、とは天來の福音、得たりと心中に雀躍して喜んだ。
 夫がまた金鑛發見の曉とは更に妙、直に二人にこの事を明して

自分の味方につけ、利をもつて永遠に口を緘して置き、最後まで
 股肱として働かせやうと、時を移さず内意を打明けた、と、素よ
 り相手は無頼の鮮人、宜しいとばかり、直に其の相談に乗つて了
 つた。

『ちやア、若し奴が左様でなく生きて居たら殺つて了うんだぞ、
 い、か』平尾は最後に念を押すやうに言た。

林も陳も強く首肯いた。

『旦那、御安心なさい、俺等二人が付いて居れば大丈夫、人間の
 一人や二人、菜葉を斬るよりは雜作ねえ』林はそろ／＼本性は發
 揮し始めた。

血氣の陳も負けずに『朝飯前の仕事だ、俺一人でお引受け申し
 やす』何所から覺えて來たか、江戸子式の啖呵を切つた。

「大分景氣好く出たね」平尾は大将氣取りになつた。「夫で俺も安心した、ちやア、林、お前にも確と頼んだせ巧くさい行けば、今の約束通りに必と運んで與るのだから、一つ骨を折つて呉れ、可いかい」

「ようがす、大丈夫です、斯う見へても、浦鹽から北滿洲を股にかけて荒し廻つた林雲章、旦那は懷中手をして見て居るだけで結構です、陳の野郎と二人して、萬事行つてのけますから……」

陳も同じやうに平尾に誓つた。

平尾は安堵した。「左様か有難い、其の方はまづいゝとして、肝腎なのは金鑛だ、早速俺が出掛けて、直接に調査しやう、皆の報告だけ聞いて居たのちやア、甚だ心許ないからね」

「ちやア、明日にでもお出かけになつたらいいでせう、お供致し

ます、陳お前一人で留守は大丈夫だらう」

「大丈夫、俺一人で引受けた」

「陳もあゝ言ひますから、早速明日にも……、旦那が御覽になると驚いて了ひますせ、真箇に、大したものですから、全く夢のやうな話、真箇とは思へない位ですよ」

「左様か、兎に角行つて見様」

「まるで金の世界だからね」

其の夜は三人天幕の下に睡つた。

翌早朝諸種の準備を整へて、平尾は林と共に窟へ入つた、一度通つた暗い路を覺束なく辿りつゝ、林は平尾を穴藏の根まで連れて來た。

平尾はひよいとその窟を差覗くと下から鎖に取り絶つて昇つて

来る者があつた。

八〇

封人窟終編

(一七)

「や誰か昇つて来た林、は、早く灯を……」平尾は叫ぶやうに言つた。

林も覺えず乗出した「えッ、昇つて来た」言ひつゝ、角燈を窟の中深く差入れた。

首を差伸して下を見ると、鐵の鎖に縋りつゝ、下から喘ぎく昇つて来るのは、死んだと思つた春彦であることが一目に夫と判つた。

「やッ、い、生きて居るよ、林」

林の目にも其の春彦なることが分つた。

「うむ、野郎！」林は言下に角燈を置いて用意の拳銃を取出した平尾が姿を隠す中に、春彦は下から銃の先を認めた。

「やッ、き、貴様は林、な、な、何とする！、危い！、危い！」

片手を舉げて銃先を避けやうとする時、無慈悲の彈丸は上から飛んだ彈丸は春彦に命つたか命らなかつたか、認めぬつかない中に、鎖に縋つた手首はするくど迂つて、首を斜にドッツと闇に落ちた。

平尾は林の顔を見て「何うだ、旨く行つたなア」物凄じい眺。

「さア、何うでせうか、降りて見ませう、死な、いと却つて後口のために面倒だ」

「夫れも左様だ、俺も探検旁入つて見様、お前から前へ進んで呉

封人窟終編

八一

れ

『承知しました』

林は拳銃を懐中に呑んで、角燈片手に脚は岩角、手は鎖に錠りつゝ、するくくと穴の下の方へと降りた。

平尾も其の後から角燈の微光を頼みに、鎖に取錠つて奥深く中へ入つた。

穴は八尺四方位の圓味をもつた形で、深さは確かに二丈はあつた。三分とは絶たぬ中に二人は底に達した。

穴の周囲も底も一面に樹枝狀板狀の金が散點して、角燈の光に爛燦と目を射た。

脚下を見ると、春彦は其所に倒れて居たが、平尾を見ると共に『うむ君は、平尾……』と、言つたが、立上らうとして得ず、不

時腹部を押へて惱んだ後に『林！、き、貴様……な、何の……』

『野郎——』

林は近着きざま、いきなり胸倉を執つた、唯一締めて咽笛を絞めやうとするのを、春彦は其の手を拂ひざま、憤然と立揚つて、平尾は鋭い目を春彦の方に注いで、愚圖々々言ふと其のまゝには置かぬぞと言はぬばかりの氣勢を装つて立つて居た。

『君！、平尾君！、た、助け……』

『誰が助ける……、貴様を殺すんだ』

『えッ、わ……』

『左様だ、神妙にしる』

『お、では……、貴様は林と共謀して……』

『左様だ、この金鑛の権利を、俺一人の手に握るのだ、貴様は邪

魔だから殺して了うのだ、早く往生して了へ、林、早く殺して了へッ

「野郎」

林は右の首にグイと咽元を押へて、岩の根へ押着けた、何の氣もなく側を見ると、岩と思つたのが、錆た鐵の扉、而かも半開いたまゝになつて居る。

平尾は早くも夫を認めた『お、林、好い場所がある、この中へ投げ込め』言ひながら近着いて見ると、餘程中は深さうだ『其處へ叩ッ込んで了へば、自然に死ばつて了う』

『お、こいつはい、』

林は春彦を引摺つて来て、扉を開ける手遅しと其の中へ突入れて、有合ふ錠をピンと卸して了つた。

* * * * *

頓て青葉句ふ初夏の候となつた。

神戸荒田町なる荒海家の庭を前にした椽先に、例の燈臺守の兒張雲は、泣いて居る田鶴子を頻りに賺して居た。

(一八)

陸廷勳の兒張雲は、例の大阪の東洋ビヤホールの地下の秘密室高杉、風間の兩兇漢の秘密を包める——へ、小泉直衛と猿渡刑事を導く手引をして美事に成功せしめた上に、風間の命令で地下室へ食事を運ぶ時受取つた鍵で、入口の扉を開け、あの混雜の

眞最中——高杉が自分の悪事を隠匿するために、地下室を爆發させる少し以前から——女装して室内に忍び込んで居た小泉猿渡の二人と共に、其處に囚へられて居た田鶴子、錦子の二人を扶け出し、必死の危難を救つたのであつた。

田鶴子と錦子の不思議の再會と、別れて後の互の消息は、暗い穴の底で既に語り盡されて居た。

錦子が女優として成功した喜びやら、田鶴子が竹嶋燈臺で父を救つた話しやらも、無論詳細に話されてあつた。

小僧の張雲は、田鶴子のためにも錦子のためにも、亦小泉のためにも無二の恩人であるから、一家族として神戸に連れて行かうと言ふ相談が一決すると共に、田鶴子錦子小泉の一行は、大阪の旅館を引揚げて神戸に歸り、夫からすつと此家に住んで居るのだ

神戸へ引移つてからも、田鶴子は片時も父の上を思はない時とてはなかつた、無事に朝鮮で目的を達されたらうか、お別れしてから三月餘になるのに、今だに何のお便もないのは、朝鮮の奥で何か間違でもあつたのではないかと、夫を思ふと流石に濕らすには居られなかつた。

「ね、伯母さん、何を泣いて居るの……、え、伯母さん」張雲は田鶴子の膝に手をかけて、仰ぐやうに其の顔を見ながら訊いた。

田鶴子は張雲の肩に手をかけて、顔を背けつゝ、涙を隠した『いゝえ、泣いてなんぞ居ないわ』と、事もなげに言つたが、聲は夥だしく曇つて居た。

張雲は訝かしげに其の顔を見た。

「泣いて居ない……、虚構だよ、泣いて居るぢやアないか」

「い、え、泣いてなんぞ……」
 「だつて涙を溢して居るぢやアないの、何が悲しいの、あ、分つた、伯母さんなんだらう、朝鮮に行つた、伯母さんの阿父さんの事を心配して居るんだらう」
 其の當時は隠して言はないで居たが、竹嶋燈臺から救つて遁して遣つた父の事を、田鶴子は其後張雲に打明けたので、張雲も其の事は知つて居た。
 田鶴子は何にも言はなかつた。
 「ね、左様だらう」張雲は竹嶋に居た當時と少しも變らず、如何にも親しげな態度であつた。
 斯う言はれると、田鶴子も張雲が、自分の兒のやうに可愛がつた、包むのは水臭いと、張雲に自分の胸を割つたのであつた。

「左様だらう、僕も左様だらうと思つた……あのね伯母さん、心配することはないよ、今に朝鮮からお手紙が来るに相違ないよ、必と御無事で居らつしやるに相違ないわ」
 「左様だとい、けれどね、あれから最う三月餘りだわ、三月になつてもお便りがないので、何か間違があつたに違ひない、お齡を召したお五體のことだから、萬一、御病氣にでもなつて居らつしやるのではないか知ら」
 「其様事はないよ、大丈夫だよ、伯母さん」
 途端に入口の格子を開けて、郵便脚夫が信書を投げ込んで去つた。
 張雲は入口に出て、今配達された信書を取上げながら、急いで田鶴子の前へ持つて來た。

『何所から来たの』

『何所だか』

田鶴子は張雲の手から手紙を受取つた、見ると表には『荒海錦子様』裏には『朝鮮京城にて平尾金作』の文字が、最と鮮やかに読み得られた。

寸時も早く中を見たいと思つて居るところへ、錦子が折好く戻つて来たので、何事だらうと直ぐ開封して二人で読み下して見た。其の文意を摘んでみると、北鮮に於ける金鑛事業は豫期以上に見た成功した、既に夫々諸種の手續をすませて總督府から採掘の権利

も握つた、就いて直接御面會の上お話ししたいことがあるので、一兩日中に京城を發し神戸へ歸る心組である、朝鮮で内地の新聞を見て初めて承知したが、貴女の女優としての成功は實に目覺しいものである、敬服の外はない、など、餘計なことは書いてあつたが、肝腎の春彦の一身上に就いては、一言も報じてなかつた、全體の文意が既に漠然たるものであつた。

『何だか變だわね』田鶴子は投げるやうに言つて『お前さんのところへ来るのなら、阿父様から來なければならぬのに……、成功はいゝとして……、ね、左様ぢやアないの』と錦子の顔を見た。錦子も手紙を膝の上に置いて『左様ね、全く姉さんの仰有る通りよ、夫に餘計な私へのお世辭なんぞ云ふて來て……、何も可笑しいわね』

「委しいことも云はずに、唯成功しただけでは少しも事情が分らないわ……」

「真箇だわね」

二人が不審を打つて居るところへ小泉が歸つて來たので、この事を話すと、小泉も手紙を読んで見て不思議に思つた。

「左様です、何うも訝しい、第一に不思議なのは、あの事業は主として春彦さんの御計畫で、言はゞ平尾君は、着手したらい、だらうと云ふ最初の勸告者に止まるのだから、従がつて平尾君から事業に就いて、左や右云つて來る必要はないのだ、何うも變です、これは、歸つてから直接に話しをするとしてありますが、何か事情がありさうだ」と云つて疑乎と考へた。

「ですが事業の方は旨く行つたのでせうね、斯うして探掘權まで

得たとしてあるのですから」錦子は小泉の顔を見ながら云つた。

「さア、夫は無論事實でせう、が併し疑がはしいのは御主人の御一身です、果して夫までに事業が運んだのなら、主人公の春彦さんから、今までの間に、一度や二度のお手紙位は……、其の事業に就いて、すよ」と斷つてから「なくてはならないぢアありませんか、ね、常識から云つて……、夫が全くなくて、三月ほど経つた今日、突然に平尾君から手紙で報じて來る、夫も御主人の事に就いて何か書いてあるのなら兎に角、全然書いてないに到つて更に疑念が深くなるぢやアありませんか」

「全くよ、其様筈のものではないのですからね」錦子も斯う云はずには居られなかつた。田鶴子も膝を進めた。

「小泉さん、何か深い事情がありますよ、必と……、私は左様考

へました。

『左様ね』錦子も合槌を打つやうに『兎に角歸つて話すと云ふのですから、何を話すか十分注意して聞きますせう』

『左様、夫に限りますわ、元來あの平尾と云ふ方は、性質の好くない方なんですから』

五日ばかりはこの噂で暮した、と丁度六日目の夕方、平尾が飄然と訪れた。

出發がけとは打つて變つた傲然たる姿、羊が虎になつたかと疑はる、程であつた。

荒海家の主従は最初平尾が来たど張雲が取次いだ時、同人の手紙には何の報道もなかつたなれど、左様でもない平尾と共に父が歸つて來はせぬかと、急ぎ足で入口に出て見たが、案に相違して依然平尾一人であつたので、一同は尠からず失望した。

兎も角も座敷へと行つて、一同は平尾を奥の六疊へ請じた。

脊廣ではあつたが、上等の洋装、短衣の間には、金時計の鎖が輝いて居た。

竹嶋燈臺の下で、夢心地に會つた田鶴子と張雲の顔を、今此家で見るのも意外であつたが、夫等を話して居る暇がなかつたので

其の話は後廻しにし、一應の挨拶をしてから平尾は直に主題に入
つた。

第一に手紙で豫報した金鑛発見の一條を、急所々々を大掴みに
して物語つてから、更に席を進めた。

平尾は故意とらしく愁然としながら「唯今お話し致した通り、
最初の目的は貫いたやうなもの、茲に最も悲しむべき御報告をし
なければならぬのが、如何にも残念でならぬのです……」語を半
にして首を垂れた。

三人は驚いたやうな體で、この平尾の體度に注意した。

田鶴子は席を進めて「あの、か、悲しむべき御報告と仰有いま
すと、ご、ご、何様事で御座います父春彦のことに就きましたは
何のお話しも御座いませんやうですが、父の身の上に變つたこと

は……」と相手の意中を窺ふやうに云つた。

「御一緒に戻るだらうと、楽しみにして待つて居りましたのに……
……、あの、別に異状は……、依然彼地の金鑛の方にでも……」錦
子は詰め寄つた。

小泉は側面から「主人は無事で居りますか」と迫つた。

平尾は憂を帯びた顔を揚げた。

「は、は、其の御主人です……」

「ね」田鶴子は前面から、

右手からは錦子が「何うか致しまして御座いますか、病人にで
もなつて、それで御一緒に……、あの、何う致しましてございま
す」と云つたが、左も左も心配になるらしい體。

「御病氣ならばまたお快りになると云ふ希望もありませんが、實に

「残念千萬……」右手の半巾で一寸目を押へた。

田鶴子の目の中は輝いた『あの……、そ、そ、夫では病氣でな
くて、ご、ご、何う致しまして御座います』

小泉も錦子も目を険しくした。

『お殺されに……』

『わ、ッ……、あの……、殺されましたんですつて』錦子は驚き
寄つた。

田鶴子も小泉も席を進めながら、夢中に息を呑んだ。

『實にお氣の毒なことで、金鑛發見の前夜、實は山賊のために天
幕を襲はれました、少時山賊共と格闘しましたが、相手は何しろ
十數人、剩へ獸同様な悍猛な奴ばかりでせう、味方は僅か四人だ
から情ない、三時間猛烈に戦つて、漸く撃退しましたが後で見る

ど荒海さんのお姿が判らない、さア大變と八方に手分して、樹の
根山の蔭を探し廻る中に夜が明けた、不圖見ると松の大木の根を
枕に無惨の横死を遂げて居られたのです全く山賊の刃に罹られた
ので……、じ、實にお氣の毒……、直様御介抱申し上げたところ
が虫の息になられてゐます、ざ、ざ、残念な次第で……、さア漸く
御遺言だけ書き取つて参りました、御遺骨も此所にあります』
平尾は斯く出鱈目を云ひながら、壺に納めた犬の骨だか牛の骨
だか分らないものを、遺言書と稱する書付と共に一同の前に差出
して、直ぐ其の手で顔を掩ふて泣いた。

小泉は昵と平尾の狂言らしい其の體を見入つて居た。

(一一一)

かねて平尾の手紙に對して、尠からず疑念を抱いて居る際である、其所へ持つて來てこの突飛な事件、田鶴子も錦子も一時は驚いて見たものゝ、何うやら狂言らしい平尾の體度を疑ぐり出した壺に納めた遺骨には目も觸れず、田鶴子は先づ遺言書と云ふのを取上げて、披いて見ると、平尾の書體で認められた左の文字が明瞭に讀まれた。

父春彦儀事業半途にして、不幸山賊のために一命を殞し申候就いては同伴の平尾君に、骨肉も及ばぬ懇情をうけ申し、感謝の辭なく候、春彦は其の赤誠を愛で、金鑛事業の全權を同

君に譲渡し、同時に錦子をも進じ申候、荒海家の負債整理其他は、一切同君の權内に一任致し候、この遺言には何人も異議無用に候

父 春 彦

田鶴子殿
錦子殿
直衛殿

願ぶる都合の好い遺言書であつた田鶴子も錦子もいよく變だと考へた。小泉は心の中で冷笑した。

『これが父の遺言書で御座いますか』田鶴子は平尾の顔を睨と見た。

平尾は故意とらしく、聲を曇らせた。

「歸り早々縁喜でもない、遺言書などをお目にかけるのは、實に残念ですが、何とも仕方がない、御心中お察し申上げます」

「この遺言は事實なんでせうね」錦子は何と思つたか斯う云つた

平尾は錦子の顔を見た「なんです事實とは」と乗出して「貴女は疑ぐつて居らつしやるのですかと、と、飛んでもない」

「いや、疑ぐるわけではないですが」と、小泉は側面から「餘り意外ですからして……」

「全く意外です」平尾も斯う云つて「最初錦子さんの御厄介になつて、神戸を出發する時は、御一緒に成功の月桂冠を頂いて、目出度歸神する決心であつたものが、斯う云ふ悲報を齎すの餘儀なきに至つたかと思ふと、皆様よりも私の方が實に意外でなりません」

一同は黙して語らなかつた。

平尾は更に「實は私の手で遺言を書くと言ふのは、世間の手前甚だ面白くないからして、直筆に願ひたいと再三お迫りしたのですが、何にしる傷は脾腹を深く貫いて居たので、口を開かるゝのさへ既に蟲の息、勿論手の自由はなかつたので……、不本意ながら私が代筆したわけで御座います」何所までも神妙に云つた。

小泉は何か熱心に考へて居る。

田鶴子と錦子とは、密々と話し合つて居たが、聽て錦子は平尾の方に向いた。

「あの……、斯う願ひたいので御座いますがね、決して御遺言に背きは致しません、此方にも思ふ由が御座いますから、一月ほど御猶豫を願ひたいのですが、如何で御座いませう私と貴下との御

結婚のことを……」自分の婚儀に託して、一月の猶豫を乞ふた。此の場合厭應は云へない『一月、ね、宜しいですとも、この遺言書さへ認めて下されば、一向差閤ありません』平尾は尙ほ春彦の臨終の様子に就いて、嘘八百を並べた末、兎に角旅館へ引揚げた。錦子は平尾が歸ると共に『小泉さん、貴下に折入つてお願いがあるので御座いますが』

『僕にですか』

『是非聞いて戴きたいのです』

(1111)

朝鮮の無頼漢に殺されて、一命を殞す程の大事件なのだから、其の當時電報で知らせて來る位は如何に何でも出來さうなものだのに、夫さへなくて骨になつて了つた今、だしぬけに其の最後を聞かせると云ふのは如何にも不思議千萬、如何に頻死の重體だからと云つて、大切な遺言書を殘すのだから、名前位は自分で書けさうなものだに、全部平尾の手に成ると云ふのも奇怪、確かに内部に綾があるに違ひないと考へついたので、錦子は小泉をして其の實否を探らせやうと思つたのだ。

『何ですか』小泉は進み出した。

錦子は小泉に其の事を話す前に、田鶴子の方に向いて「ね、姉さん、私、斯う思ふんですがね、實は今の平尾さんの話ですが、何うも真個らしく思はれないのよ、私には……」

「左様ね、實は私も左様なのよ、斯うつて何かい、考案があるの」「あの、小泉さんには誠にお氣の毒ですけれど、平安北道の飛龍山に行つて實否を探つて来ていた、かうと思ふんですがね、此所に居たんぢやア何を云はれたところで薩張わけが分りませんしね」「左様ね、左様願はれ、ばこれにこしたことはないのだが……」

錦子は小泉の方に向いた。

「貴方には真箇にお氣の毒ですけれど、如何でせう小泉さん、御足勞願はれますまいか知ら、必と事實が間違つて居るだらうと思ふのですから」

小泉は如何にも快げに「いや、其様事は何でもないですよ、實は僕も内心左様思つて居つたところで貴女から御命令があれば、直に出發します、僕も貴女方お二人のお考へ通りに、尠からずあの男の行動に疑念を抱いて居るのですから、其疑ひを晴すにも都合がい、ですし、是非遣つて下さい、僕は喜んで出かけます而して如何なる困難を排しても義務を果して、御主人からうけて居る恩義の萬分の一に報じたいですから」

「あの、ぢやア、行つて下さいますか」錦子は満悦の體。

田鶴子も暗黒界に光明を認めたやうに嬉しく「何分にも宜しきやうに願ひます」

「ね、く、行くも行かないも、頼むも頼まないもないですよ、願つても出かけて探偵したいです、僕は平尾に秘密に出發します

から、平尾へは内々にして置いて下さい、果して我々の思ふやうに腹の黒い男とすると、何様事を企てないとも限らないですから……、極内々の中に行きたいです」

「承知致しました、何とか旨く云つて置きますから、成るべくお早くお探り下さいまし、丁度此所に昨日大正座から取つたお金が御座りますからこれを全部旅費に差上げます、何卒御足勞ですけれど、何分宜しいやうに願ひます」

『真箇にお氣の毒でしたわね』

『い、わ、何う致しまして』小泉は金包を開いて見て『お、斯様に戴かないでも……』

『い、わ、左様でもない、何様事で要るやうにならないとも限りせんまから、何卒お持ち下さい』

錦子は無理に小泉に金を握らせた。

其の夜の中に準備をして、小泉は翌日の山陽線で出發した。

朝鮮釜山港の水營灣の方に向いた人煙稀薄の淋しい海岸、背後は小高い山、其の根に大きな窟がある、窟の奥には蠟燭が點つて居て、其の側に茫然と坐つて居る一人の女があつた。

(一四)

女は意外にも藝者の濱吉である、彼は曩に馬關の沖合の岩礁の中へ女装せる朴範斗のために欺かれて連れて來られた時、兄と思ふ

高杉に兄妹の名乗りをして十萬圓の金塊の被家者は自分のために
 は恩人であることを告げ、是非それを戻して呉れる様に話さうと思
 つて居た利那、突然馬關署の巡查隊の包圍をうけ、茲に其の機會
 を失つて止むなく岩礁の裏面から小舟で逃げたのであつた。
 其の後何うかして兄に邂逅したい一念から、脚に任せて心當り
 を捜して見たが、運悪く會うことが出来なかつた。

其の中に不圖氣の着いたのは、肌身放さず隠して居た手帳、そ
 の中に認めてあつた釜山の地下室の事、十萬圓からの金塊を隠し
 て置いたのだから、何日か一度は舞ひ戻るに違ひない、釜山へ行
 つて地下室に待つて居る方が當もなく探し廻るよりは優しだと思
 つたので馬關から直に釜山に渡つた。

例の手帳を頼みに地下室と言ふのを探し廻つた、尤も手帳の末

の方に地下室の地理が委しく認めてあつたので、夫を何所までも
 根本にして……、ところが何うしても知れない何日探しても分ら
 なかつたが、判らぬではすまされぬと、猶一生懸命にあさり立て
 た結果、知らず知らず此の窟へ辿りついたのだ。

手帳の中の書付の模様から見てもこの窟らしく思はれたので、
 内へ入つて捜した、すると、地下室とも見れば見らる、其所に、
 金塊の密藏してあつたのを發見するに至つた。

愈よこれである、此室さへ放れなかつたら、兄勘三には必と會
 へると信じた。

窟の中で三月や四月の餓を凌ぐには充分なる糧食の準備してあ
 つたのを見出したので、夫に餓を凌ぎつゝ格にない岩窟生活をす
 ることになつた、が三月も通り越して了ふと流石に倦々して來た

『何をして居るんだらうね、何程呑氣だつて、十萬圓からのものを置放しにして置いてさ、私のやうなものが悪黨仲間にあつた日には、そつくり持つて行かれて了うんだよ』

燃へ揚る蠟燭の火を見つゝ、濱吉は斯様事を考へた。

『私は妹でもお前さんは兄さんだと聞いたたら、何様に驚くだらうね、夫れよりはまだ驚くことがある、十萬圓の金塊を奪はれた主は、自分の妹の之恩人で、其のために一家は離散した、と聞いたら何うだらう、嘸驚くに違ひない』

『人が居ないだらうと、ひよつこり歸つて来てみて、私の居るの氣が付いたら、何様に驚くだらう、餘り慌て、私を一彈の下に殺しはしまいき、殺されては大變、其の用心もしなければならな

い、靴の中にあんなものが數多く入つて居たのだから、あの術で何かに化けて來るだらう、何に化けて來るだらうか知ら紳士か乞食か』

斯様事を心に繰回して居る時、窟の外に人の姿、折柄の夕月に夫と内から認められた。

『おや、誰か……、誰だらう一體』

濱吉は覺えず中から進み出した。

夕月に落ちた淡い人影は、直ぐ内へ入るかと思ふと、其の様子もなく二度三度窟の前を往來して漸く内へ向つて歩んで來たが、外から様子を訝がるやうに窺いて、右手に拳銃を取出した。

内の濱吉は驚いて、窟の壁に脊を附けた。

外の人影は其のまゝ、突爾と入つて来た、見ると夫は果して洋装の高杉勘三であつた。

内から濱吉が夫を認める間に、高杉の方から聲を懸けた。

『おゝ、濱吉ぢやアないか』と、聊か安堵の體になりながら、右手の拳銃の筒先を下に降しつゝ、『ど、ど、何うして斯様所に来て居るのだ』驚きは怪しみの眉となつた。

『何うしても来ないわ、私はね、お前さんに少し話したい事があつて来たのよ』

『なに、話し？』

『え、左様よ』

敵と敵との態度が、忽ち親しげな味方に變つて、手を執り合はぬばかりに奥へ進み、相對して岩の上に腰を卸した。

高杉は耳袋の巻煙草を取出して、蠟燭の火に點けて吸ひながら『意外な所で會つたものだが、お前は何うして此所にこの窟のあつたことを知つて居たのだ、え、濱吉』

『何うしたつてい、ぢやアないの、夫は後で話すわ、随分お前さんは悪黨だわね』意外ありげに斯う言つた。

高杉の目は光つた『なに、悪黨だ、悪黨は今判つた話ぢやアない、俺の悪黨は昔からだ』と、一呑みに大きく出て『一體、俺に話と云ふのは何だ……、おい、濱吉』これが現在の妹とは知らない。

濱吉も其様々子は見せずに「お前さんも随分酷いことをして居るのね、人間はね見切りが肝腎だわ、大概なところで悪黨の脚を洗つて眞人間になつたらよくはないの」

「なんだと、眞人間だ？ 洗ふと洗ふまいと大きにお世話だ汝等の指圖で動くやうな勘三ちやアねわ、黙つて居ろ」

「動かない？、ちやアなんだね。私が言つたんちアや言ふことが聞けないと言ふのだね、ねわ、左様だね」

「左様よ、其様事は決まつて居らア」

「ちやア、私は今から訴へるよ」

「訴へる？、何か俺の悪事をか……へん、お氣の毒だ、何所に悪事をした證據がある、證據のねわものは訴へるわけにも行くめえ」

「證據がない？、證據を見せやうか」

「見せねわ」

「奥に藏つてある金塊は何？」

聞くと共に高杉の目は、大なる驚愕に燃へた、急に返す辭がなかつた。

「おい、何だよあの金塊は、上海碇泊の釜山丸の中で……」と云ひかけると、

高杉は慌て、相手の聲を押へるやうに手を舉げて「叱、靜かにしろ」

「靜かには出來ないわ、お前さんが改心して、今から眞人間になれば兎に角、私の云ふこと用ゐないで、未だく悪いことをすると云ふのなら、私は今から訴へて出るよ、あのね、お前さんは知るまいが、あの金塊の奪られ主は、私のためには無二の恩人……」

「恩人が何うしたんだ、恩人だつて蜂の頭だつて、俺の仕事に關係はねねんだ、訴へるなら訴へて見ろ、汝がこの窟を出ねえ中に一弾の元に撃ち殺して遣かから」巻煙草を捨て一旦收つた拳銃を取出したのであつた。

濱吉は高杉の前に、自分の五體を投げるやうに寄せた。

「殺せるなら殺して御覽」

「なに」

「なにぢやアないよ、殺せるなら殺して御覽と云ふのだよ、私はね……もし、高杉さん、私はお前さんの妹のお濱だよ」

「わッ」

高杉は愕然。

濱吉は却つて水のやうに沈着た。

(一六)

お濱の濱吉は形を正して、豫て母お龜から聞いて居た自分と兄勘三との關係と、母が臨終に残した心盡しの數々を泪と共に話した。

高杉は手の拳銃をぼろりと落して、初めて夢から覺めでもしたやうに、悄然として腕を組んだ。

濱吉は更に「ね、兄さん、そ、其様事情ですからね、いまでも何様に阿母さんが、草葉の蔭から兄さんの事を心配して居らつしやるか知れないわ、私、決して悪いことは云ひませんからね、何卒、今が今善人に立返つて、今までの悪事の罪滅し……、ね、兄

さん』初めて親しい兄と妹の體度になつて『何も云はずに奥に藏つてある十萬圓の金塊を……、ね、兄さん、神戸へ行けば荒海さんのお宅はあつてよ、ね、兄さん』

高杉はこの妹の温かい語の中に、尠なからず自分の罪を悔いた妹と知らずに攫つて來たり、妹の恩人とも知らずに其の人を窘めたり、世になき母に苦勞をかけて來たりしたのは、誰の罪でもない、全部自分の罪である、あゝ悪かつた、妹の云ふ通りに今直に眞人間に立戻らうと思つた。

『お濱、す、す、濟まなかつた、たつた一人のお袋に苦勞をかけたも、妹と知らずにお前を攫つたりしたのも、釜山丸の船中で金塊を奪つたのも自身の心得違だ、あゝ悪かつた、全部俺が悪かつたのだ、い、妹、お、お濱、か、勘忍して呉れよ、か、勘忍して

呉れ』

鬼の眼に血涙滂沱、勘三は妹お濱の手を執つて泣いた。

お濱も袖に目を押へて泣いて『ち、ちやア何んですか兄さん、わ、私のやうなもの、云ふ事を聞いて下さつて、今から眞人間になつて下さるのですか、あゝ、有難い、夫で私の心も通れば、草葉の蔭に居らつしやる、阿父さんや阿母さん、ど、ど、何様にお喜びでせう、兄さん、私は嬉しいわ、嬉しいわ』よゝと泣いた。

『そ、そ、其様に……、こ、斯様兄を思つて居て呉れるとも知らずに、こ、こ、この勘三は……、妹、お濱、俺はお前に面目ねえす、すまねえ』

『兄さんは居らつしやらないのですし、普通の事をして居たのでは、女の瘦腕に阿母さんを養うことが出來ないばかりに、斯様

賤しい藝者になんぞ落ちて了つて……、私だつて兄さんに面目ないわ』

『お前の面目ないことはない、夫は身分は賤しいかも知れないが人間のすることをするに不思議はない、稼いで金で親を養うと言ふのぢやアないか、お前に其様事を言はれては、俺は穴へでも入りたい位だ、あゝ、悪かつた……、何と言ふ性根の腐つた真似をして來んだらうなア』

更け行く蠟燭の灯影寒く、男女二個人影は、魔のやうな自然岩の上に着ちて、其のまゝ凍りつきそうに見えた。

『兄さん、最う何も言はないで頂戴、兄さんさへ今日限り眞人間になつて下されば、最う私何とも思はないわね、ですから……、悪かつたの、すまなかつたのつて、其様水臭いこと云はないで頂

戴、私だつて申譯がないわ、兄さんに斯様事を申上げて……ですけれどね兄さん、いろく神戸で御最負になつた荒海の旦那が、あの金塊のことからして……、あ、あんな御身分に……』
『最う言つて呉れるな、こ、こ、この通りだ』
云ふ下から、高杉は拳銃を執り直して、あなやと見る間に、咽元に擬した。

高杉の一命は、あなや風前の孤燈。

(二七)

『ア、まな、何をなさるんです！、あ、危いわ、もー、危いわ』
驚く目、狂ふ拳、言下に濱吉は、兄勘三の手首に取り絶つた。

「危いからお放しなさい、斯様もの、ね、さア……、もし、兄さん」

「いや、放さん、お濱、放せ！、これ、放せ！、放せと云ふに……、放して殺して呉れ、よ、お濱！」

「し、し、死んで何うするの、今このまゝで死んでは犬死よ、ね兄さん、お放しなさいよ、危いから斯様もの……」

濱吉は勘三の手の拳銃を、其の手から奪うとする、勘三はまた放すまいと騒ぐ、曳く、戻す、戻す、曳く、その拍子に、勘三は脚を滑らせて、岩から僵つた、濱吉は其の手から拳銃を奪つた。

勘三は争ふ力も抜けて、撞と岩の上に腰をついた。

其の間に濱吉は拳銃を隠して、兄勘三の前に来た。

「兄さん、今のやうな無分別はよして頂戴、兄さんが心底眞人間

になつたのなら、奥に隠してあるあの品を神戸の荒海さんのところへお届けして、夫から自訴して出て下さい、左様すれば私の顔も立つし、兄さんが眞人間になつた験にもなるわ、今此所で死んで了つたのでは犬死よ、ね、左様でせう、兄さん、左様ぢやアなくつて、ね」

現在の妹お濱から、碎いて哺めらるゝやうに云はれて、勘三も成るほど、思つた、自分の短慮を今更のやうに氣着いたのである
「今此所で自殺するのは犬死……、盗んだ品を被害者に戻して……、成るほど違えねエ、其の通りだ、妹に異見をすべき兄が、反對に妹から異見をされる、あゝ、何と言ふ情ねえ人間になつて了つたのだらうなア」

勘三が悔恨の血涙は、雨の如く其の勝に落ちた。

濱吉は其の膝に絶るやうに取り付いて「兄さん、最う嘆かないで下さいよ、私の願さへ聞いて戴けば、私はもう何にも言はないわ、嬉しく思ふのよ、眞箇に……、ですからね、兄さん、今私の云ふやうにして、神戸へ行つて詫びて頂戴、最う旦那も大概朝鮮から歸つて来て居らつしやる時分ですから」

春彦が金鑛事業で北朝鮮に行つたこと、田鶴子のことを委しく話した。

聞けば聞くほど、不思議なことばかり、勘三は驚き且つ呆れた。「荒海の旦那が朝鮮へ行らつしやつたのも、今云ふ通り銀行の方の負債を、金鑛事業で成功して、お果しにならうと云ふお考へなんですから、あの金塊さへお手に戻れば、寒い北朝鮮で御苦勞をなさらないでもい、筈よ、お齡を召した旦那なんですからね、考

へると眞箇にお氣の毒……」濱吉はほろりとなつた。

「違ねえ、全くだ、俺ア左様云ふ方とも知らずに、と、と、飛んだことをして了つたのう、すまねえことをして了つた。

「最う過ぎたことは云はないで頂戴、私の今の願ひさへ協へて下されば私は満足よ、何卒、神戸へ行つて……ね、兄さん……」

「承知した、今から直ぐ出かける」

「ですが劍呑だのね、途中で、ごかくと一時に縛られるやうなことがあると……、何うしませう」心配らしく云つた。

「大丈夫、心配するな」

途端に窟の外に人の聲、高杉と濱吉とは、屹となつて耳を聳かした。

「おい、高杉、危ねえー用心しろう」

聞覚えある風間の聲音、續いてきたくと亂調子の靴音。
尋常ならぬ氣勢であつた。

(二八)

平尾金作が、戸に荒海家を訪ふた際、金鑛の探掘權を朝鮮總督府から許可されたやうに云つたのは、ほんの一時の出鱈目であつた、實は未だ其の手續がすんで居なかつたので、尠なからず他人のために横領するを恐れて居た。
殊に田鶴子、錦子、小泉等の體度に早くも其の胸中を察したので、これは油斷がならぬ、田鶴子、錦子の二人が相談の結果、小泉でも同地に特派して、内情を探られては却つて面倒だと思つたので、

用心に如くはないと直ぐに朝鮮に立戻つて、平安北道飛龍山に根
——其所に天幕を張つて、金鑛の入口を警戒して居た林と陳の許へ遣つて來た。

『お、旦那何うしたんです、神戸の方の一件は旨く行きましたか』かねて内意を話して置いたので、直ぐ斯く云つて訊いた。

平尾はすまぬ顔色で、出迎へた林の顔を見つ、『林、困つたことが出來たよ』と云ひつゝ、火の側へ來て帽子を脱つた。

『何です、困つたこと』林も流石に不安の眉で『何うしたんです旦那、神戸の方の一件は駄目ですか』其の顔を仰ぐやうに見つ、云つた。

『神戸の方も面白く行かなかつたん、俺の言動に不安を抱いて居たらしい様子だから、誰か様子を探りに來んも知れん』

『探りに？』陳も側面から語を狹んで『ちやア何ですかい旦那、旦那の仰有ることを先方で信用しないで、實否を探るために入でも出すんですかい』

『出すと決まつたのを耳にした譯ではないが、當時の模様から考へて、或は出さんとも限らん、人に來られては面倒だから、今の中に警戒して貰はうと思つて實は歸つて來たんだがね』

『お、左様だ、旦那』林は何事か思ひ出した體になつた『旦那のお留守に如何だらうかと思ひましたから、例の野郎を叩き込んで置いた、穴の底の窟の扉の前へ行つて、様子を窺がつて見たんですよ、すると、何うも變なので』

『なに、變だ、未だ死な、いかね、春彦は』平尾は目に角を立て、熱心な態度になつた。

林も膝を進めて『夫が確かに死なないで居るとは分らないのですがね何うも變なのですよ』

『變、變とは』

『活て居るやうでもあるし、また死んで居るやうでもあるし、實は内へ入いつて確かめて見て、萬一活て居つたら、陳と二人して叩き殺して了はうと思ひましてね、扉を開けやうと思つて、いろいろ行つてみたのですが、何うしたんだか開かねわので』

『開かない、そいつは變だ、其様筈はないのだが、何にしる生死の判らんのは困る、併し、何うも妙だね、食物のない所に活て居ると云ふのは兎に角不安心だ、早速行つて確かめ置かうちやアないか、左様でもない何うがした風の吹廻して、荒海春彦に活て居られた日にやア、この金鑛は荒海の手に歸するばかりでなく、

錦子を俺の女房にするわけにも行かん、左様だ、直ぐ窟の中に入つて確めやう、さア、一同準備をして呉れ萬一活て居つたら、一弾の下に殛して了ふんだから』

『宜しい』

『承知した』

三人は結束して立つた、將に窟の入口に進まうとした時、天幕の陰から躍り出した五人の無頼漢、手に手に兇器を閃めかしつゝ、三人の前路に立塞がつた。

(二一九)

不意に現はれた五人の男は、一見朝鮮沿岸の漁夫らしい打扮を

して居た。

拳銃を持つて居る男もあれば、棍棒を携へた男もある、支那刀の古いのを提げたものもある。

態度は頗ぶる敏捷で、三人が不意を喰つて驚いて居る中に、ご、ごー、と、其の前路を扼した。

『お！、な、な、何だ！、貴様たちは』平尾は驚いて叫ぶやうに云つた。

其の間に林と陳とは、準備の拳銃を取出しつゝ、つかくど一同の前に出た。

『貴様たちは何をするんだ』林が先づ叫んで『何うしやうと云ふんだ』

陳も嚴然と身構へた。

「退かんと撃つぞ……」

相手の無頼漢は何も云はなかつた、ほんの束の間に、目と目で話し合つたやうだつたが、頓て打合せが済んだらしいと思はる、瞬間、いきなり一人が進んで来た、一人が進むと後の四人も續いた、衝き出す棍棒、振り冠る刃、ばらばらと蜘蛛の子が走るやうに、三人目菟けて五人が肉薄した。

「畜生！」

「コノ野郎！」

平尾も林も陳も、我劣らずと入り亂れた。

三人は成るべく、相手を側へ寄せないで、撃ち仆さうとしたが五發まで放つた彈丸は、皆空に飛んで了つた、相手はますます勢ひを増して、猛烈に殺到するので、三人は大分と色めいた。

「林、確かり行れ、敵は強いぞ」

「大丈夫、陳、確かりしろ」

腕と腕と相搏つ響き、脚と脚と相觸る、音、衝き倒す、殴り付ける、組んで押し倒す、抱き着いて倒れる、何の意味からとも分らぬ不意に起つたこの争闘は、二三時間猛烈に繼續された。

何のために五人の無頼漢に不意討をされたのか、この鮮人は何者の廻し者か、何う云ふ意味があるのか、少しも分らなかつた、唯挑まる、がまゝに三人は争つて居る。

敵も疲れた、味方も疲れた、其の中に日が暮れかゝつた、鮮人は何う云ふ考であつたか、例の金鑛の入口から三人を遠去けるやうに誘ひ争つて居た。

平尾は敵の優勢なのに焦つた。

「陳、早く騒ち仆して丁へ、林も何をして居るんだ殺つ、けて了へ、高の知れた五人ばかり」

敵と戦いながら平尾は叫んだ。

「大丈夫」

「今直です」

林と陳は追はれながら斯う云つた。

僅かの寸隙に乗じて、平尾の背後から一人が組み付いた、拳銃をぼろりと捨て、平尾は鮮人無頼漢の手を執り、體を動かすよと見る間に、背に乗せてはたりと投げた、投げられた一人が起き上がらぬ中に、他の一人は側面から斬つて蒐つた、顔を背向け空を斬らせて置いて、いきなり相手の利腕を無手と執り、グイと引き寄せて衝き仆すと、よろ／＼と五六歩脚下を浮かせつ、ばた

りと音を立て、木の根に倒れた。

見ると林と陳とは、三人の鮮人無頼漢を相手に頻りに戦つて居る。平尾は其の方へ行かうとする時、側面から殺到した一人が、棍棒の先に地を打つてよろめいた。

得たりと踏ん込み、相手の素首を捉へて、二間ほど引き摺つて倒したが、この時何者の手から飛んだのか一弾は平尾の胸へ。

日暮れの暗がりに乗じつ、この混雑を背後に見ながら、金鑛へ通する窟の内へ風の如く徹び込んだ洋装せる一人の男があつた

（三〇）

金坑の底の穴藏に奥に、鮮人無頼漢林雲章のために叩き込まれ

た春彦は、疾うに死なねばならぬ一命を、以前この坑を探險したらしい何者かが坑内に遺棄せる古米を舐りつゝ、漸くにして露の一命を繋いで居た。

最初未だ勇氣のあつた中は、内から鐵の扉を押し開かうとして種々に苦心を重ねて試みたが平尾が無難作にかけて去つた鍵は、驚くばかりに嚴重で押ししても、衝いても碎ければこそ、赤錆に錆び付いて、ガチャリとも言はなかつた。

最初は毎日々々春彦は日課同様に内から押したり衝いたりして居たが漸次に五體に疲勞が來て其の根氣も續かなくなつて了つた其の中に坑内に充滿して居た悪い瓦斯に中てられて、坑内で病人になつて了つた。搗て、加へて食物の缺乏、いよゝゝ自滅の時に近着いた。

春彦は坑内で半死の状態に陥つた流石に思ひ出さるゝのは、この事業には直接關係の深い神戸に残した錦子の事、二人を竹嶋の魔窟から救ひ出して呉れた田鶴子の事、偕は留守宅を委託した小泉の事、萬感はこもゝ胸に迫つて、離愁の想を一入深からしめたのであつた。

「味方と思つた平尾は、意外にもあの通りの敵……、わ、乃公を……、乃公を斯様目に逢はせ居るのも、あの男の仕業ぢや、やれ骨は折るの、活動するのと言ふて置きながら、この大金坑を發見した曉に、翻然として志を一變し、乃公に刃を向ける……、ふ、不埒な奴ぢや、平尾の精神では、乃公を亡者にして、己一人の手に權利を收めやうと言ふのぢやらうが、左様は天が許さぬ、天は昭々として人道を照して居る」

火もない坑内の空気は、冷々と四邊を鎖して、病苦に苦しむ春彦の五體を、其冷酷な懷中に犇と押へた。

一四〇

『あッ、あッ、』

急に腹痛でも感じたらしく、春彦は坑内に身を横へ、左の手足に腹部を押へて惱み出した。

手足や額面の垢、服はぼろ／＼に破れてゐる、衰えた頬、瘦せた腕、以前の春彦に較べると、全然別人のやう。

この事業に就いても、尠からず苦心を重ねた上に今差迫つての窮状は、白きが上に此の人の髪を、更に／＼雪と染めた、搗て加へての病苦、殆んど半ば死んで居るやうであつた。

『あッ、あッ、お、痛い！あッ、あッ……』

春彦は恐るべき病苦に今捉へられつゝある。

『あ！あ、ご何うしたんだらう、あッ、あッ、』

両手に胸を押へたり、腰の邊りを撫で廻したり作るやうに手をついたり、坑の中を匍ひ廻つたり、急に胸を撫でたり、目を白黒したりして居る。

遂に耐らなくなつたと見えて、鐵の扉に取り絶つて、ひよろひよろと立つた。

立つたが如何にも、切なさう、

『あッだ、だ、誰か！、あッ、お、苦しい、あッ、痛い！』
 ばたりと倒れた、苦し紛れに再び取絶つた、険しい目で脚下を見た。

と、ばつと落し來る一道の火光、上の穴から人が降りて來る様子、春彦は苦しいながらも其の方を仰いだ。

角燈片手に降りて来るのは黒い人影、敵か味方か、上は闇。

(三)

右手に角燈を提げ、左手は鎖、両脚は岩角を踏みしめつゝ、上から漸次に降りて来る黒魔のやうな影が、夢のやうに燈下に浮ぶ覺束ない靴の先に、一步一步岩角を探りつゝ、漸次に底近く降りて来るのを見ると臍氣ながら、春廣の洋装に頭上の鳥打帽が克く見わた。

其の中に人の姿は、坑の底に降り立つた、見ると夫は意外にも小泉直衛であつた。

小泉は飛龍山の麓へ来て、金鑛の所在を探ると直中に躍り込む

には第一天幕の中の見張人が邪魔になる、下手を間違つて、蝮蛇の失策はしたくないと思つたので、故意と五人の無頼漢に金を與へて、天幕の下から遠去けた後、窟の中に忍び込んだのであつた。

小泉は角燈の火を舉げて、底に立つて四邊を見た目に入つたのは、眼前一間とは隔たらぬ、其所にある鐵の扉、格子のやうに透されて居たので、外からも内からも一目で克く判る。

小泉も中の人を肥と見た、春彦も外の人を窺ふやうに見詰めた

「お、あ、貴下は……、うむ、御主人？」

小泉はふらくと鐵扉に寄つた。

内の春彦も、僅かに小泉なることを認めた。

……、小泉』

春彦は夢中に叫んだ。

『御主人？、お、お懐しう御座います』

小泉は急いで角燈を捨て、鍵の側へ寄つた。

『小泉、は、は、早く出して呉れ、平尾に……、平尾のために……、は、早く』春彦は苦痛を忘れて叫んだ。

……、は、早く』春彦は苦痛を忘れて叫んだ。

『た、た、大概、こ、斯様事だらうと存じました、併しまア好かつた、唯今直ぐです、暫時お待ち下さい』

小泉は二三度鍵をガチガチやらせて漸く捻ぢ切つた、鐵扉を外

へグイと開いて『さア、お出下さい』いきなり春彦の手を執つて

外へ引き出した。

春彦は糸の如くに瘦せはふけて、見る影のない鬼のやうな姿、

ばたりと、小泉の膝に倒れか、つた。

『小泉、よ、よ、克く来て呉れたのう、乃公はすんでのこと、この穴中で自滅して了ふどころだつた、悉くこれ平尾が罪惡、この

金鑛の探掘權を、己一人の掌中に握らんとした結果ぢや、お蔭で

斯様偉大な金鑛を……、あッ、あッ』首を俛れ顔を皺めた。

『ど、ど、何うなさいました、し、確かりして下さい、若し、御主人』

小泉は倒れやうとする春彦の五體を、左の腕と膝の上とに押へ

右手を廻してグイと抱いた。

『わ、乃公は最う駄目ぢや、小泉！、た、田鶴子や錦子！、み、み

皆無事かね、田鶴子には竹嶋の燈臺の下で會うたのぢやが、うむ

無事か』微かな聲音。

『はい、皆御無事で、お二人とも神戸に居らつしやいます』
『うむ、二人とも』

『はい』

この時突然に、金坑の上でズドンと發砲の音がした。

（三三）

『や！』

左腕に半死の春彦を抱へたまゝ、小泉は右手に準備の拳銃を執つた、少時は下から屹と窺がつたが、上の弾丸は二發とは續かなかつた。

春彦の耳には今の銃音が入らぬもの、如く『そ、そ、夫で乃公は安堵した、小泉、君は今から直ぐに朝鮮總督府に行つて、金鑛

の採掘權を獲て呉れ、平尾如きものが何を言はうと取上げる必要はない』微かに言つたが、再び病苦が身に迫る様子『あッ、あッ、痛い』五體に浪を打たせつゝ、悶へ苦しむのであつた。

小泉は春彦を其所に横にして、背中を撫でた。

『もし、御主人、き、氣を確かに、ご、何うなすつたんです、さア、確かりなさい、もし、御主人』

春彦の答はなかつた、小泉は狼狽へながら肩にかけて居た水筒の口を開けて、春彦の口へあてがつて、グゴグと水を吞ませた。春彦は一旦閉ぢた目をまた開いた。

『御主人、お、お氣が着きましたか』

『お、有難う』春彦は少時黙然として居た。

『如何です、最うお快しいのですか、何卒、氣を確かり今貴下が

お弱りになつては大變ですから、何卒、確かりなすつ……、何所
です、痛むのは……、擦りまうしか、ね、何所です、胸ですか」

「いや、駄目ぢや、最う乃公の生命は……」

「そ、そ、其様氣の弱いことを仰有つては不可ません何卒氣を確
かりお持ち下さい」小泉は一生懸命に言つた。

反對に春彦の聲音は細かつた「小泉……、乃公は此所に……、

ふ、ふ、懐中の奥に遺言狀……、乃公の小指の血で認めた遺言狀
を持つて居るから……、あッ、あッ……」

小泉の目は愕然とした。

「遺言狀……」

「左様ぢや、乃公の自身に認めた、血書の遺言狀があるからのう
こ、こ、この遺言狀によつて、萬事荒海家の事を頼む、よ、よ、

宜しいか」漸次に聲は低くなつた。

小泉は春彦を確と抱へた。

「そ、そ、其様……、と、と飛んでもない……、き氣を確かり持
つて下さい、ね、何卒……、一體、何うなすつたんですなア」

「も最う疾うにない一命、天が君の來て呉れるのを知つて、夫ま
で助けて置いて呉れたのぢや、この金鑲は君に進呈する、田鶴子
や錦子の上、遺言狀によつて、ば、ば萬事いゝやうに頼む、あッ
あッ」

また目を瞑ぢた。

「何故其様……、し、し、確かりして下さい、確かりして」

角燈の光に見ると、春彦の顔は最うこの世の人ではなかつた。
「やッ、最う不可んか、も、も、御主人」

夢中に兩手に抱き揚げ、耳を口元につけて、呼吸の有無を窺が
つたが、早や絆切れた様子だ、手足は漸次に冷却して行く。

『うむ、駄目かー、もー、御主人ー、荒海さん、荒海さん』 聲を
限りに。

途端に二發續いて銃聲が響いた。

小泉は驚いて春彦の遺骸を引抱へた、右手には捨てた拳銃を握
つた。

見ると鐵鎖を傳はつて降り來る者がある、確かに鮮人、林の俤
に酷く似て居た。

(三三三)

大切なる恩人の遺骸を守つて居る小泉に取つては、此の敵は非
常に強大なものであつた、下手を間違付いた、めに春彦の死體を
手放すやうな事があつてはと思ふと、敵の様子を確めない中は、
容易に手が降せないと考へた。

小泉は背後に春彦の死體を庇ひつゝ、拳銃を携へて立つた。

『おい、貴様は何者だ』

小泉が聲をかける中に、相手は鐵の鎖を傳つて降りた。

『汝こそ何所の人間だ、この金鎖は俺達のものだ、早く去れ！』
見ると果して林、いまにも一彈の下に相手を殞さうとして居る。

小泉は相手の顔を睨と見た。

「なに、貴様の有だと」

「左様だ」

「馬鹿を云へ、此所に居らる、荒海さんが發見されたのだ、愚圖
愚圖云ふと撃ち殺すぞ！」

「なに、荒海……」林は一寸首を伸して見て「うむ、死ばつたな
ら、汝は何所の人間だ、金鑛は俺のものだ早く出ていけ」

「貴様こそ出ていけ、貴様の發見したものをちやアない、荒海さん
が發見されたのだ、早く出る！早く出る！早く出る！早く去れ！」

林は小泉の胸板目蒐けて不意に一彈を放つた。小泉が身を交し
て彈丸を避ける時、金坑の上から放つた一彈が小泉を目蒐けたの
であらうが狙ひは外れて林の胸板にドンと命つた、林はばたりと

前に倒れた。

何うした機會か、ばた／＼と坑の入口から落ちて來たのは陳で
あつた、陳は岩角に頭を碎いて、林と共に即死した。

其の間に小泉は春彦の死體を抱へて、するすると鐵の鎖を傳は
りながら金坑の入口に匍い出した。

* * * * *

危きところを遁れた小泉は直ぐ其足で最寄の郡主の許を訪ひ、
事情を打明けて金鑛の監視を依頼した、さうして春彦の死體を焼
いてから、直に朝鮮總督府に行つて金鑛採掘の權利を獲、春彦の
遺骨と遺言状とを携へて神戸へ歸つたのは、四月の下旬であつた
荒海家は全家此の悲報に泣いた。

風間は釜山で縛に就いたが、高杉と濱吉とは金塊を携へて其の場を通れ、目を忍んで神戸の荒海家に來たのは、小泉が歸るのと同日であつた、金塊は直に荒海家に戻つたが、高杉と濱吉とは同じ及に伏て自殺した。

仁川銀行に對する荒海家の債務は金塊で戻ると共に整理が着いた。

春彦が残せる遺書に基いて、錦子と小泉との婚約は成つた、二人が結婚式を挙げたのは、飛龍山金鑛の探掘を小泉と某獨逸人と共同して行ふことになつた翌年で、田鶴子と其の獨逸人との間に婚約の成つた其の年であつた。

平尾金作が鮮人のために撃殺されたことは、小泉が春彦の死體を飛龍山麓で茶毘に附する時既に知られて居た。

竹嶋燈臺守の陸廷勳の噂は聞かなかつたが、其の兒の張雲は田鶴子錦子等のためには無二の恩人だと云ふので、永く荒海家に駐ることゝなつた。

田鶴子を蛇責にした木庵と松兵衛は其後何うしたらう、少しも風説を聞かなかつた。

飛龍山の金鑛は其後着々探掘に従事したが、掘り進むにつれて鑛區の偉大なることゝ、金質の優秀なることゝが、世人の話題に上り、東洋一の大金鑛であるといふことは、外國電報の報ずるところとなつた。

五年の後良人と共に世界漫遊の途に上つた錦子の手には、玉の如き男兒が抱かれて居た。

封

人

窟

(終編)

(終)

樋口隆文館

營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版に及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君に及び貸本を營業とせられ諸君は多少に拘らず御注文被下度候
 △卸賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本願ふとしてなるや御書き添へを願ふ
 △樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新出版發行致べく候
 △樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候
 △樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大坂八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

大正四年二月一日印刷
 大正四年二月六日發行

定價金四拾五錢

著者權所有

【附與編終寫人封】

著作者 渡邊 默禪
 發行者 樋口 源次郎
 大阪市南區鰻谷仲之町
 二百二十四番屋敷
 印刷者 田中 松之助
 大阪市南區大寶寺町
 仲之町六十五番地

發賣元

大阪市南區三休橋
 鰻谷南入西側

樋口隆文館
 (振替口座大坂八七九七)

江見水蔭君作
 八幡白帆君畫

中央新聞
 掲載小説
三怪人

各册共木版
 極彩色密畫挿入
 全四册各一册
 實價金四十五錢宛
 送料四册二付八錢
 但シ内地限り

怪賊の一團あり、其行動の幻奇妙怪なる、實に神沒鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻惡辣を極め、近時有名なりしチゴマ、ボンノ一の徒輩をして、遠く三舍を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戰慄すべき惡争苦闘を経たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を剝り肉を刻む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつてす、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお獎めをする。

渡邊默禪君作

口繪 歌川國松君
執筆 谷洗馬君
者 鈴木錦泉君

川上恒茂君 艷麗極彩色
長谷川小信君 口繪挿入美本

千里眼

全三冊二付

實價一圓四十錢

(送料共にて)

全二冊二付

實價金一圓

(送料共にて)

横山花子

掲載小説

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲惨骨を剝り肉を刻むの消息がある彼女の父は東京府の參事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歳、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となり了して天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の徑路を寫す間に、靈と肉との戦ひ、個人と社會の葛藤の如何に險惡峻烈なるかを説きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其内容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誕らざるを知られよ。

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀罪

全二冊
美術木版口繪挿入
各一冊實價五拾錢宛
送料二冊二付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とたへられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か陰れたる大なる秘密が無ければならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に同情の涙を濺かしむる悲痛凄慘なる、且美しき物語があるのだ。

大阪新報記者

山行友李風君作
本英春君畫

龜甲組

(木版極彩色頗美本)
全三冊
實價各一冊金五十錢
送料一冊二付六錢
三冊二付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騒がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

露光量違いの為重複撮影

大阪新報記者
中村文彦氏著作



本書は大阪新報紙上に掲載して大好評を博せし事小説であつて、昭和十一年四月、
當時、東京、神奈川、千葉、埼玉、各府三縣の警察界を騒がせし陰謀が情なる一大事件あり、
る、編中に動揺する人物には、四侯不敵の壯士あり、異域不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人
あり、薄命可憐の庶女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、讀骨動と肉を躍らし
むべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

樋口 隆文 出版新小説之部

著者 名 梗概
江見水蔭 □三 怪人 怪人 此は中央新聞紙上に連載して數十回に及ぶ驚き多し
□三 怪人終編 此は波瀾曲折多き面白き小説なり
□探偵の娘 此は東京時事新報に連載して大好評を博せし面白き小説なり
□大正五人女 此は中央新聞で大評判を取りました面白き小説です
□大正五人女續編 好評請合
□大正五人女續々編
×泣かぬ女 此は大阪新報で大好評でありました水蔭氏一流の面白き小説です
×泣かぬ女終篇
×女馬賊 此は面白き水蔭式の新小説です
×女馬賊後篇

伊原青々園 □迷ひ子 此は東京新報にて掲載して大好評を博せし面白き小説なり
×迷ひ子續編
×迷ひ子終編
渡邊黙禪 □怪の怪後編 此は保険附の面白き小説です
□美人魔後編 此は横濱公園に於ける殺人事件の小説なり
□女獅子子 此は満洲にて目覚ましき大活動を一せし天下有稀の女傑の傳記なり
□續々女獅子子 此は神出鬼没の怪行動をなせし天下稀有の怪美人の傳記なり
□七首藝妓 此は櫻井一策との係を書いた面白い小説なり
□櫻井一策後編
×風流菩薩 此は東京毎日電報に連載して大好評を博せし面白き小説なり
×風流菩薩後編

同同同同同同同同同同同同同同同同

□俠妓小鶴後編 (これは波瀾曲折多
き多趣味の小説な
り)
□千里眼後編 (これは東京日本新
聞にて讀者を狂喜
せしめし大好評小
説)
×千里眼續編
×横山花子後編 (これは可憐薄命な
る横山花子の小説
なり)
×春の風後篇 (これは默禪一流の
面白い新小説です)
×鬼棍原後編 (これは大阪時事新
報に掲載して大好
評を博せし物劇に
演じ又活動寫真に
取りしもの)
×鬼棍原續編 (これも頗る好評小
説)
×雷鳴六郎後編 (これも面白い悲劇
的の新小説です)
□磯の松風後編 (これは東京日本新
聞で好評を博せし
變化波瀾に富める
多趣味の新小説)
□千枝子後編
□千枝子終編

同同同同同同同同同同同同同同同同

同同同同同同同同同同同同同同同同
和天華
□封人窟後編 (これも默禪式の面
白い小説です)
□封人窟終編
□静子後編 (これは悲劇的の戀
愛物で劇に演じ又
活動にも映寫し博
した面白いもの)
□浪まくら後編 (これも悲劇物です
好評受合)
□浪まくら終編 (これも面白い戀愛
小説です)
×愛の関後編 (これは善惡二人の
女を主人公とした
戀愛物で面白いも
のです好評請合)
×愛の関終編 (これは温良の淑女、
一は獸的の淫婦、
此性情互に兩極端
の二女戀に戦ふ譚
人)
□二人の女後編
□二人の女終編
□弱き人後編
□弱き人終編

同同同同同同同同同同同同同同同同

□おとし子 (これも天華氏が得
意の作です好評請
合)
□おとし子終編 (これも面白い悲劇
です)
□犠牲後編 (これも面白い悲劇
です)
□犠牲終編 (これも面白い悲劇
です)
□罪ならぬ罪 (これも天華式の面
白い小説です)
□罪ならぬ罪後編 (これも天華式の面
白い小説です)
□戀の敗者 (至極面白い一風變
つた戀愛小説です)
□戀の敗者後編 (至極面白い一風變
つた戀愛小説です)
□海の豪傑 (山田長政、濱田彌
兵衛等を主人公と
した武張つた勇ま
しい冒険小説です)
□海の豪傑後編 (山田長政、濱田彌
兵衛等を主人公と
した武張つた勇ま
しい冒険小説です)
□海の豪傑終編 (山田長政、濱田彌
兵衛等を主人公と
した武張つた勇ま
しい冒険小説です)
×女賊三人 (これは三人の毒婦
を書いた新小説)
×女賊三人後編 (これは三人の毒婦
を書いた新小説)
×男後編 (一風變つた男を主
人公とした小説で
あつた劇に活動に
新聞の好評を博し
たもの)
×男終編 (一風變つた男を主
人公とした小説で
あつた劇に活動に
新聞の好評を博し
たもの)
同同同同同同同同同同同同同同同同

同同同同同同同同同同同同同同同同

同同同同同同同同同同同同同同同同
須藤南翠
□命後編 (悲劇的新小説にし
て劇に演じ活動寫
真に面白き小説
なり)
□命續編 (これも多趣味の新
悲劇物です)
□武士 (これも多趣味の新
悲劇物です)
□電後編 (これは女優と發明
家とを主人公とし
て書かれた面白い
小説です)
□電終編 (これは女優と發明
家とを主人公とし
て書かれた面白い
小説です)
□電後編 (これは女優と發明
家とを主人公とし
て書かれた面白い
小説です)
□電終編 (これは女優と發明
家とを主人公とし
て書かれた面白い
小説です)
□戀の力後編 (内容は題名によつ
て御推察を願ひま
す鬼に面白くも
のです)
□戀の力終編 (内容は題名によつ
て御推察を願ひま
す鬼に面白くも
のです)
□浮木船 (これは女優と華族
の令嬢を主人公と
して書いた家庭向
の戀愛小説です)
□浮木船後編 (これは女優と華族
の令嬢を主人公と
して書いた家庭向
の戀愛小説です)
□浮木船終編 (これは女優と華族
の令嬢を主人公と
して書いた家庭向
の戀愛小説です)
□闇のうつつ、後編 (二人の男が一人の
女を争ふて如何に
煩悶苦心するかこ
れが本書の讀所)
□闇のうつつ、 (二人の男が一人の
女を争ふて如何に
煩悶苦心するかこ
れが本書の讀所)
□闇のうつつ、 (二人の男が一人の
女を争ふて如何に
煩悶苦心するかこ
れが本書の讀所)
□闇のうつつ、 (二人の男が一人の
女を争ふて如何に
煩悶苦心するかこ
れが本書の讀所)
同同同同同同同同同同同同同同同同

露光量違いの為重複撮影

春風樓主人 ×藤浪後編
 同 ×藤浪後編
 同 地獄谷後編
 同 地獄谷後編
 同 薄命怨後編
 同 薄命怨後編
 同 罪の子後編
 同 罪の子後編
 同 飛將軍後編
 同 飛將軍後編
 同 紫組後編
 同 紫組後編
 同 肖像畫後編
 同 肖像畫後編
 同 肖像畫終編
 同 肖像畫終編
 同 女小説家(全)
 同 女小説家(全)
 同 男禁制(全)
 同 男禁制(全)
 同 探偵染の手巾(全)
 同 探偵染の手巾(全)
 同 水月尼(全)
 同 水月尼(全)

これは劇に演じて好評であつた家庭向の新小説です
 二冊讀切の悲哀な小説です
 薄命を怨める女を主人公とした小説
 意味の深い情と涙に富んだ悲劇小説
 深山の奥の別天地を舞臺として書かれた怪奇小説です
 これは飛將軍の續物です
 これは面白い新小説です劇に演じて好評を博したものです
 多趣味の新小説
 新物で面白いもの
 面白い事請合
 新物です
 女傑の傳記です

同 妻の罪(全)
 同 妻の罪(全)
 同 狸心中(全)
 同 狸心中(全)
 同 父なき子後編
 同 父なき子後編
 同 甚九郎稻荷後編
 同 甚九郎稻荷後編
 同 甚九郎稻荷終編
 同 甚九郎稻荷終編
 同 操くらべ後編
 同 操くらべ後編
 同 残り草後編
 同 残り草後編
 同 残り草終編
 同 残り草終編
 同 鐵槌の音
 同 鐵槌の音
 同 迷ひ路後編
 同 迷ひ路後編
 同 三人の仇
 同 三人の仇
 同 三人の仇後編
 同 三人の仇後編
 同 可憐の棄兒後編
 同 可憐の棄兒後編
 同 可憐の棄兒續編
 同 可憐の棄兒續編
 同 賈造紙幣(全)
 同 賈造紙幣(全)

新家庭物悲劇小説
 事實小説で心中物
 戀愛的悲劇物です
 頗る變化波瀾に富んだ多人數の喜ぶ講談風の小説です
 悲劇小説で面白い新物です
 悲劇小説にして劇に演じて多大の同情を以て迎へられたものです
 一冊讀切の戀愛物
 二冊讀切の戀愛物
 事實小説にして新物です
 至極哀ッぽい新小説です
 面白い探偵物です

小嶋孤舟 □浪かしら後編
 同 □浪かしら後編
 同 □梅花後編
 同 □梅花後編
 同 ×春待つ人後編
 同 ×春待つ人後編
 同 ×春待つ人終編
 同 ×春待つ人終編
 同 ×花咲く家後編
 同 ×花咲く家後編
 同 ×花咲く家終編
 同 ×花咲く家終編
 同 □さくら草後編
 同 □さくら草後編
 同 □さくら草終編
 同 □さくら草終編
 同 □影の淵後編
 同 □影の淵後編
 同 □影の淵終編
 同 □影の淵終編

大阪日報にて好評を博せし悲劇的新小説
 戀愛小説にして大反響を博したる物
 これは劇に演じて大賞を取つた孤舟氏の一流の戀愛小説です
 例に依つて極く面白く読める小説
 これは探偵小説を讀むに似て面白く読める小説です
 これは東洋傳説の家庭を描いた戀愛小説です
 極く意志の強い女主人公として描かれた探偵小説で面白く読める小説です

同 愛と財後編
 同 愛と財後編
 同 愛と財終編
 同 愛と財終編
 同 富の力後編
 同 富の力後編
 同 富の力終編
 同 富の力終編
 同 白菊御殿
 同 白菊御殿
 同 銀杏小路
 同 銀杏小路
 同 其の女(全)
 同 其の女(全)
 同 伊藤銀月(全)
 同 伊藤銀月(全)
 同 出潮(全)
 同 出潮(全)
 同 甚九郎稻荷後編
 同 甚九郎稻荷後編
 同 甚九郎稻荷終編
 同 甚九郎稻荷終編
 同 因縁果(全)
 同 因縁果(全)

可憐の一人婦人を主人公として書かれた家庭向の小説です
 戀愛を説き愛を語れど卑猥に陥らず
 これも面白い家庭向の立志戀愛小説
 好評を得し小説
 好評を得しもの
 これは銀月一流の自傳小説なり
 銀月一流の面白く讀める小説
 これは時事新聞に採りて大喝采を博せし多趣味の小説
 年にあつた探偵小説で面白く読める小説
 探偵小説で面白く読める小説
 面白く読める小説

同 慰問袋 袋 戀愛小説で新物で
 同 慰問袋後編 袋 袋 同上
 泉 鏡花 ×七本 櫻 袋 戀愛小説です
 雪 鷲庵 □談話長者屋敷 (これは二冊で讀切の怪談物です)
 同 談話後の長者屋敷 (これは新物です)
 山岸 荷葉 □五人娘 (全) (これは新物です)
 黒法師霞堤 □戀しき仇全 (家庭の戀愛小説)
 霞 提 ×澄める心 (全) (戀愛家庭小説なり)
 同 女學生 女學生を主人公として書いた戀愛物
 同 女學生後編 同上
 同 現代の女 當世のハイカラ令嬢を主人公とした新物です
 同 現代の女後編 同上
 同 ×若 夫婦 (情愛に富んだ新物)
 同 琴 の 音 (これも面白い新物)
 五 竹園 □香 人 形 (これは大阪朝日新聞紙上で多大の同情を以て讀者に迎へられた悲哀小説です。家庭向の讀物として宜しいものです)
 □香 人形後編 同上

如鬼坊 □鱗與之助 鱗與之助の變化に富める面白い一代記です。三冊續き
 同 池沼鯉之助 記です。三冊續き
 同 花生 □小車新三 (二冊續きで面白いものです)
 同 後の小車 (同上)
 同 金齒のお鼻 (全) (女の墮落する道行を書いたものです)
 同 芳尾生 □新説皿屋敷 (怪談物で皿屋敷の新説です)
 同 春秋園 □俠妓胡蝶 (これは危くも悪漢の手に落ちてピルルの手話となつて無残や海外に密航せしめられた身の上を書いたものです)
 同 俠妓胡蝶後編 同上
 三嶋霜川 □行き違ひ (これは面白い戀愛小説です)
 同 行き違ひ後編 同上
 花冠者 □思はぬ戀 (思ふ戀は仲は遂げられずして戀はぬ戀は思はぬ事によつてなれり本書は家庭向の戀愛小説)
 □思はぬ戀後編 同上
 同 思はぬ戀後編 同上

— 山面白く新版を發行します —

通口出版講談小説之部

◎玉田玉秀齋講演

◎武田家 眞田鬼憚正 (これは有名なる武田家三彈正の傳記です) 全三冊
 ◎同 保科槍彈正 (同上) 全三冊
 ◎同 高阪智惠彈正 (同上) 全三冊
 ◎元和中 中條兵庫之助 (これは劍法中條流の元祖として有名なる元和豪傑中條兵庫之助の面白い一代記です) 全四冊
 ◎奥羽 後の中條 (同上) 全四冊
 ◎豪傑 方丸弘行 (これは越後の黒姫山の旗上をした豪傑兒雷也の傳記です) 全三冊
 ◎豪傑 魔風軍藤太 (同上) 全三冊
 ◎緒方 黒姫山の旗揚 (同上) 全三冊
 ◎天保 浪花の大潮 (これは有名なる大鹽平八郎先生の傳記です) 全二冊
 ◎天保 後の大潮 (同上) 全二冊
 ◎寛永 春日熊之丞 (これは豪傑春日熊之丞の面白い一代記です) 全二冊
 ◎後日 宮嶋大仇討 (同上) 全二冊

◎玉龍亭一山講演

◎天明 三人男 (これは演者が得意の專賣物です) 全二冊
 ◎山田屋辰五郎 (同上) 全二冊
 ◎夕立勘五郎 (同上) 全二冊

○義侠の大井道實 演者は人情新講談にして
○不敵の児嶋お春 演者が得意の専賣物です
○可憐の小出仙太郎 全三冊

●秋月玉光講演

○豪傑の師の梅吉 演者獨特の俠客物にして
○同 後の薬師 至極趣味のある面白いも
○同 其後の薬師 のです
○女 俠龍神お玉
○女 俠後の龍神
○俠客 唐獅銀治 全六冊

●旭堂南陵講演

○豪傑青地作右衛門 演者有名なる浪花三劍士
○同 上總六郎 の傳記にして南陵の専賣
○同 大力牛之助 物 全三冊
○戀の松平辰子 演者は有名なる星亨氏の
○同 屑屋鐵五郎 關係せる事件です 全二冊
○海賊船東天丸 演者は南陵得のの新講談
○東天丸五良吉 で面白いものです 全二冊

●松林伯知講演

○講談 太平記 演者は有名なる太平記を
○同 卷之二 読み易く講談に直したも
○同 卷之三 のです
○同 卷之四
○同 卷之五 全五冊讀切

●玉田玉芳齋講演

○小松後藤荒太郎 演者は有名なる小松三勇
○同 稻葉太郎 士の傳記です
○同 水間大八郎 全三冊にて讀切
○豪傑杉本備前守 演者は豪傑が勢揃ひをし
○同 武田武者之助 て上州箕輪城にて大仇討
○同 武田鬼景 をする勇壯なる御話
○同 神刀忠次郎
○豪傑勢揃箕輪城大仇討 全五冊

●桐野金城講演

全五冊

○韋駄天大人 演者得意の俠客物です
○火車軍次 全三冊讀切
○甲府の仇討

○俠客劍の電次 演者が十八番の讀物です
○同 甲州定五郎 から面白い事は受合です
○同 墨田の夜嵐 全四冊
○同 最後の血櫻

○天正加藤孫六嘉明 演者は有名なる會津騒動
○高倉長衛 の御話でございます 全三冊
○後の高倉

○旗本船越八郎 演者は演者獨特の讀物で
○源三位の松 至極趣味のある物 全三冊
○善悪お淺

○赤格子九郎兵衛 演者は有名なる三都勇劍
○入若大次郎 傳神崎堤百人斬の御話
○神崎堤百人斬

○天下幽霊問答 演者は有名なる大阪妖怪
○怪談後日の幽霊
○天下三傑最後 屋敷の由來記です
○産湯の森變化退治

●浮世亭夢丸講演

○客時宗五郎兵衛 演者は演者得意の面白い
○俠客後の時宗 俠客です
○浪花節俠客揃 演者は節附の浪花節稽古
○同 勇士揃 本です
○同 武勇競

●松月堂榎林講演

○日槍本佐分利左内 演者は槍術の三大家とし
○日槍本大嶋伴六 て名も高き上記三豪傑の
○日槍本梅田奎之丞 傳記なり

●神田伯海講演

○實説お俊傳兵衛 演者は至極情愛のある面
○お俊傳兵衛後日談 白いものです 全二冊

●平林黒猿講演

- 怪傑 金忠輔 (これは有名なる豪傑金忠輔の面白い一代記です)
- 同 後の金忠輔
- 同 其後の金忠輔
- 仇摩 耶山靈驗記 (一冊讀切の仇討物です)
- 豪傑 瀨川采女吉次 (有名なる瀨川采女の趣味)
- 同 後の瀨川采女 (變化に富む一代記です)
- 講 演 滑稽 揃 (面白い滑稽集です)

●秋津洲櫻香講演

- 怪談 不思議の家 (これは新怪談物です一冊讀切)

●東海亭金龍講演

- 忠孝 二代の勇士 (これは加藤家の遺臣怪童飯田友千代の一代記です)
- 武勇 飯田友千代
- の春 槍の小太郎 (これは面白い豪傑物です)
- 四十 御前大試合 (全一冊)

- 怪談 水谷騷動 (これは怪談物の御家騷動記です)
- 怪談 後の水谷騷動

- 俠客 伊丹の與之助 (これは俠客物で三冊續の物です)
- 女俠 伊達のお峰
- 俠客 歡喜天安太郎

●神田伯龍合演

神田伯龍 玉田玉秀齋

- 美 少年 録 (これも有名なる美少年録を講談にしたもので至極)
- 後の 美少年 録 (情台のある面白いもの)
- 其後の 美少年 録
- 最後の 美少年 録

●山崎琴書講演

- 怪美人 伊藤夏子 (これは演者得意の面白い探偵新講談です)

●神田伯鱗講演

- 素 人 探 偵 (面白い探偵新講談です一冊讀切)

南陵改め

●旭堂一道講演

- 義 俠 信 夫 常 吉 (これは全三冊讀切俠客物)
- 後の 信 夫 の 常 吉
- 最 後 の 信 夫 (です頗面白し)
- 鮮 血 妙 國 寺 (これは有名なる堺事件を講談にしたものです)

●松月堂魯山講演

- 劍 客 木 曾 庄 九 郎 (これは有名なる劍客木曾白雲齋先生の傳なり 全一冊)
- 同 木 曾 白 雲 齋
- 磯 畑 伴 藏 秀 國 (これは有名なる豪傑磯畑伴藏先生の傳なり 全一冊)
- 磯 畑 伴 藏 旅 日 記
- 鐘 捲 自 齋 巡 國 記 (これは鐘捲流の元祖通家入道自齋先生の傳記です)
- 龜 井 名 槍 傳 (これは槍術の大家龜井新十郎先生の傳記です 全一冊)
- 豪 傑 龜 井 武 藏
- 劍 法 岡 大 天 狗 (これは諸岡一羽齋、岩間小熊、土子泥之助の三劍士傳なり)
- 劍 法 岡 大 天 狗
- 名 人 岩 間 小 天 狗
- 劍 士 子 泥 之 助 (全三冊)

花鳥叢書之部

- 1 探偵 血染の手巾
- 2 小説 戀しき仇
- 3 小説 幽霊船
- 4 落語 金馬集
- 5 幻術 仙冠者義虎
- 6 天狗の木鼠小法師
- 7 術をばぶ 荒象園鬼門
- 8 無敵 槍の小太郎
- 9 少年 槍の八十番御前大試合
- 10 槍術 佐分利左内
- 11 名人 日本武術流祖録
- 12 磯畑伴藏天下巡遊記

此花鳥叢書はホケット形天金クロス表装金文字入の美本でありまして實價はどれも取り一冊に付貳拾五錢宛の均一です、中には探偵小説もあれば戀愛小説もある剛壯活潑の武勇譚もあれば洒脱滑稽なる落語集もありましてこれを讀まれても至極面白うございませうから流車流船や電車中での讀物としては至極適好なものでございませう

桂文治外四名講演

◎三友落語集

實價二十八錢
送料四錢

これは面白い落語集です

中川伊勢吉
岡本鶴治外九名講演

◎大阪浪花節大會

實價各三十五錢
送料各金四錢

これは大阪で第一流の浪花節連の大會を速記したものですから同好の人に取つては至極面白い物です

神田伯海講演

◎滑稽稽揃

實價二十五錢
送料四錢

これは至極面白い滑稽講談集です

舟坊君戯作

◎新喜劇十二番

實價貳拾八錢
送料四錢

これは今大阪にて大流行の物で一讀抱腹絶倒すべし至極滑稽面白いものです

大阪大家十四名講演

◎十八家浪花節講演集

實價各三十錢
送料各四錢

◎第二浪花節講演集

實價各三十錢
送料各四錢

講演者の内には吉田奈良丸をはじめ岡本鶴治中川伊勢吉等の十四名を含み浪花節の稽古本として至極宜しいものです

小説本實價表

一冊定價

卸直

○印の物は……貳拾五錢……

◎印の物は……參拾錢……

□印の物は……四拾五錢……

×印の物は……五拾錢……

花鳥叢書は……貳拾五錢……

送料一冊六錢三冊迄八錢「内地限」

卸直目錄は販賣御希望の方又は貸本營業の方に限り郵券三錢送らるれば進呈いたすべく候

江見水蔭君作
八幡白帆君畫

中央新聞
掲載小説
三怪人

各冊共木版
極彩色密畫挿入
全四冊各一冊
實價金四十五錢宛
送料四冊二付八錢
但シ内地限り

怪賊の一團あり、其行動の幻奇妙怪なる、實に神沒鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻惡辣を極め、近時有名なりしデゴマ、ボンノ一の徒輩をして、遠く三舍を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戦慄すべき惡争苦闘を経たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を剝り肉を刻む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつて、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお奨めをする。

新田 靜 灣 君 作
谷 洗 馬 君 畫

立志 小説 富の力

各册共木版
極彩色口繪挿入
全三册
實價各一册四十五錢宛
送料三册二付八錢

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立て、故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮闘努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。

大阪新報記者
行友 李 風 君 作
山本 英 春 君 畫

龜 甲 組

(木版極彩色頗美本)
全三册
實價各一册金五十錢
送料一册二付六錢
三册二付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小説であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騒がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小説である。

渡邊默禪君作

口繪者 歌川國松君 洗馬君 鈴木錦泉君

川上恒茂君 長谷川小信君

艷麗極彩色 口繪挿入美本

日本新聞

千里眼

全三冊二付

實價一圓四十錢

(送料共にて)

掲載小説

横山花子

全二冊二付

實價金一圓

(送料共にて)

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年前以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の一美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譚の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲惨骨を剝り肉を刻むの消息がある。彼女の父は東京府の参事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歳、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となり了して天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の経路を寫す間に、靈と肉との戦ひ、個人と社會の葛藤の如何に險峻烈なるかを説きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其内容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誕らざるを知られよ。

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀罪

全二冊

美術木版口繪挿入

各一冊實價五拾錢宛

送料二冊二付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とた、へられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世

にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か陰れたる大なる秘密が無け

ねばならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に

同情の涙を幾かしむる悲痛凄慘なる、且美しき物語があるのだ。

巖谷小波君序
山岸荷葉君著 鏑木清方君畫

小五人娘

全一冊
美術木版畫挿入
實價金四拾五錢
郵送料金六錢

山岸荷葉君の文は、既に世に定まれる評あり、本書は、子が獨得の麗筆を揮つて、可憐愛すべき五人娘の運命を叙せるもの、加ふるに鏑木清方子が丹精を凝せる、木版彩色數十度摺の美人畫を以てす、眞にこれ、文藝裝美無比の好讀物

渡邊默禪君著 川上恒茂君畫

女獅子

全三冊
實價各一冊
四拾五錢
郵送料各一冊
六錢

著者默禪子自白、予、從來事實譚なるものに筆を著ししこと數十回に達したるも、未だかゝる大規模の大事業に手を染めたることあらず……實に然り……遂に文久年間、其端緒を發きて明治三十七年に其の尾を曳き、前後四十有餘年の永きに跨れる、天下稀有の一女傑が傳記にして、關係の局面甚だ闊く、變幻怪奇の波瀾縱橫錯出、讀んご應接に暇なからんを、乞ふ愛讀をたまへ

渡邊默禪氏著
長谷川小信氏畫

怪の怪

全二冊
表紙口繪
極彩色美本
實價各一冊
金四拾五錢
郵送料各一冊
六錢

これは文名東部に鳴る渡邊默禪子が、天馬奔空の快筆を揮つて、黒石子爵家大波瀾の真相を描寫した、奇々怪々の怪小説であるから、是非一冊は購て見玉へ、隆文館の主人が御勸告をする……

半井桃水君著
高橋舟齋君畫

探偵 贖造紙幣

全一冊
實價金四拾五錢
郵送料金六錢

水や天、水や水なる太平洋の中央に於て、漁夫が偶然に得し一箇の密閉せる小瓶子の中より、一世を欺罔せる大奸賊の罪惡は、意外にも世間に暴露するに至り、されど注意深く巧妙に行はれたる犯罪の真相は、一朝一夕にして探り知る能はず、流石に老練なる探偵博士をして、如何に慘憺たる苦心をせしむるか、これ一篇の讀みどころである乞ふ愛讀を賜へ。

稻岡奴之助君著 小峯大羽君畫

小男禁制

極彩色木版畫挿入
實價四十五錢
送料六錢

あながち藝妓ばかりぢや無い、堂々たる一國議政の代議士でさへも、金力次第で何方へでもといふ、黄金萬能の現代に於て、さても珍しや、金力に轉ばず權勢にも靡かぬは、今新橋で賣出しの流行妓、藝も達者なれば面も申し分無い、男禁制藝妓の萬叶屋の玉吉である。

掲げた金看板にケチ厘の掛直も無く、藝と愛嬌以外の物は、大臣であらうが元帥であらうが、モルガンであらうが、今丹次郎であらうが、一視同仁平等無差別、誰彼無しに御斷り申すと、稟と拗たる枝振の面白さ、天晴名花よこれ手折らすばと、其道にかけて無敵の猛者といはれし、現代屈指の三富豪が、一萬圓の懸賞で時日を限り、鎗を削り火花を散らして、女退治の大競争をやるといふ、一寸風變りの面白い小説は此男禁制!!

伊原青々園君著
井川洗厓君書

都新聞迷ひ子

實價各一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢

著者青々園君の文は、既に世に定まれる評あり本篇は會て都新聞に連載せられ、讀者より非常に好評を博せし小説なり、以て内容の如何を察せられよ。

神戶又新日報掲載
同記者中村兵衛著
長谷川小信書

探偵 血染の手巾

美紙口繪共極彩色美本
實價 四拾錢
郵税 六錢

この血染の手巾は神戶又新日報紙上に連載して、大好評を得せし探偵小説である。可憐花の如く妙齡の佳人は、可憐殺人の嫌疑者となつた。呼、實に大疑問である。外面如菩薩妙齡の一人女、什麼に迫つて敢てこの大罪を犯せしものぞ、呼、疑問實に不可解の大疑問である。此大疑問を解せんが爲に、如何に探偵が慘憺の苦辛をするか、これ一篇の讀みどころである……

渡邊默禪君著
長谷川小信君書

鬼梶原

實價金四拾五錢
送料金六錢
極彩色美麗木版畫挿入

本篇は、大阪時事新報紙上に大好評を博し、又、劇に演じて大入大當を取りし、素敵に面白き奇小説である。著者は御馴染の默禪先生。繪も御馴染の小信君の筆、文は繪の如くに、畫は文の如くに、文畫双つながら驚麗無比、眞に近來の好讀物である。

小嶋孤舟君作
長谷川小信君

大阪日報浪がしら

實價各一冊 金四拾五錢
郵送料一冊 金六錢
類 美 本

これは新聞紙上でも大好評を得、續いて演劇でも活動寫真でも、いづれも非常の大入大當を取りましたる、素敵に面白い悲劇的新小説でござる。

217
122

終

